

仙台市文化財調査報告書第 292 集

若 林 城 跡

— 第 4 次発掘調査報告書 —

2005 年 2 月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。仙台市は宮城県のみならず、東北地方の中核都市として文化的・経済的に飛躍的な発展を遂げております。この事は開発事業に特に顕著で、長町副都心開発による都市基盤整備事業をはじめ、市内各所において土地区画整理事業や道路の整備、公共・民間による大規模施設などの建設が立て続けに行われております。

市内には旧石器時代から近世に至るまでの数多くの埋蔵文化財が存在しております。これらの中には一昨年に国史跡に指定され、調査・整備が進む仙台城跡や、遺跡を保存し公園整備が進んでいる山田上ノ台遺跡、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、さらにかつての陸奥国府と考えられる郡山遺跡など、学術的評価が高い遺跡も多く、私たちはこれらの文化遺産を後世に伝える責務を負っているものといえます。また今後も増えると予想される埋蔵文化財調査に対応した体制整備も求められるなど、課題も山積しております。

本報告書は、若林城跡の調査成果を収録したものです。調査ではこれまで謎に包まれていた政宗時代の若林城の遺構が発見されたという点において、大きな成果を上げたと考えており、今後の調査に期待するものは大きいといえます。このようなことから本書がより多くの方々に活用され、学術研究の場においても役立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関、調査に参加なされた多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成 17 年 2 月

仙台市教育委員会

教育長 阿部芳吉

例 言

1. 本書は、宮城刑務所内の全体改築に伴う若林城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会のもとに、株式会社パスコが行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会文化財課 佐藤淳、株式会社パスコ 岡本範之・佐藤好司が行った。
4. 本書の執筆は、佐藤淳の責任と指導のもとに、下記の通り行った。
第1章、第6章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤 淳
第2章、第3章、第4章、第5章1・3、第6章・・・・・・・・ 岡本範之
第5章2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤好司
5. 調査と報告書作成にあたり宮城刑務所のご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
6. 調査および報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 土層注記に記載している土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1997）に基づいて認定した。
2. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000『仙台東南部』の一部を使用している。また、調査区位置図には、宮城刑務所提供の原図を基に作図した。
3. 調査の際の平面座標基準は、日本測地系平面座標第X系を基にしている。
4. 本書に使用した遺構挿図縮尺は、遺構全体図1/120、個別遺構図1/20・1/40・1/60、壁面セクション図1/50である。また、方位記号の無いものは真北を基準にしている。
5. 本書に使用した遺物挿図縮尺は、1/3である。
6. 遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下のような略号を付している。
F 軒丸瓦・丸瓦 G 軒平瓦・平瓦 H その他の瓦 I 陶器・土師質土器（ロクロ使用） J 磁器
7. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SK 土坑 SD 溝跡 SX 性格不明遺構 P ピット
8. 遺物観察表中の（ ）内数値は推定値を示す。

本文目次

序文

例言・凡例・本文目次

第1章 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	第5章 検出遺構と出土遺物
第2章 遺跡の位置と環境	1 1区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1 遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・ 2	2 2区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
2 周辺の歴史的環境・・・・・・・・ 3	3 試掘区の遺構と遺物・・・・・・・・ 18
第3章 調査の経過と記録	第6章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
1 調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・ 3	引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
2 調査記録・・・・・・・・・・・・・・・・ 4	写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第4章 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・ 5	

第1章 調査に至る経緯

若林城は伊達政宗が仙台城築城後の寛永5年（1628）に築いた城で、晩年の多くをこの城で過ごした。政宗の死後、城内の建物は仙台城二の丸などに移築され、城は廃城となり、近世この地は藩の御帳蔵や御薬園として利用されていたことが絵図や文献などからわかっている。明治になると、ここに宮城集治監が設置され、宮城監獄を経て大正11年に宮城刑務所となり現在に至っている。

若林城跡の調査はこれまでに3回実施されている。このうち、城内での2回の調査は施設建物建設に伴うもので、発見された主な遺構には古墳時代中～後期の円墳1基、平安時代の竪穴住居跡4軒のほか、竪穴遺構や土坑、中近世の建物跡を構成する可能性のあるピット群などがある。しかしながらこれらの遺構が若林城に関連するか否かは不明のまま現在に至っており、また、後の度重なる改変により当時の遺構が失われていることも示唆されていた。

今回の調査は宮城刑務所の全体改築に伴うもので、計画では城内の既存施設を使用しながら空閑地に新規施設を建設するというものである。建設予定面積は約22,200㎡と広大で、今年度は5ヶ年計画の第1期分となる。

平成16年3月に宮城刑務所より改築工事に伴う埋蔵文化財協議書が提出されたことを受け、4月に今後の調査計画策定の資料とすべく、予定建物範囲内に計205㎡の試掘調査を実施した。調査はまとまった調査区が設定できない条件でのものであったが、ほぼ全域に後世の盛土がされており、かつての刑務所施設による攪乱が著しい箇所もあるが、時期不明の盛土層や溝跡、落ち込みなどの遺構らしきものが数箇所において検出された。この結果を受け、当課と宮城刑務所が再度協議し、今年度調査は第1期工事分に合わせ、刑務所中央に位置する2棟を対象とし、各々に150㎡の調査区を設定し、9月6日に調査を開始することとなった。調査においては遺構が古墳時代から近世にかけて重層的に検出される可能性があり、遺構状況によっては協議の上で調査区の拡張や期間延長などがあり得る旨を予め刑務所側に提示し、調査を開始した。

調 査 要 項

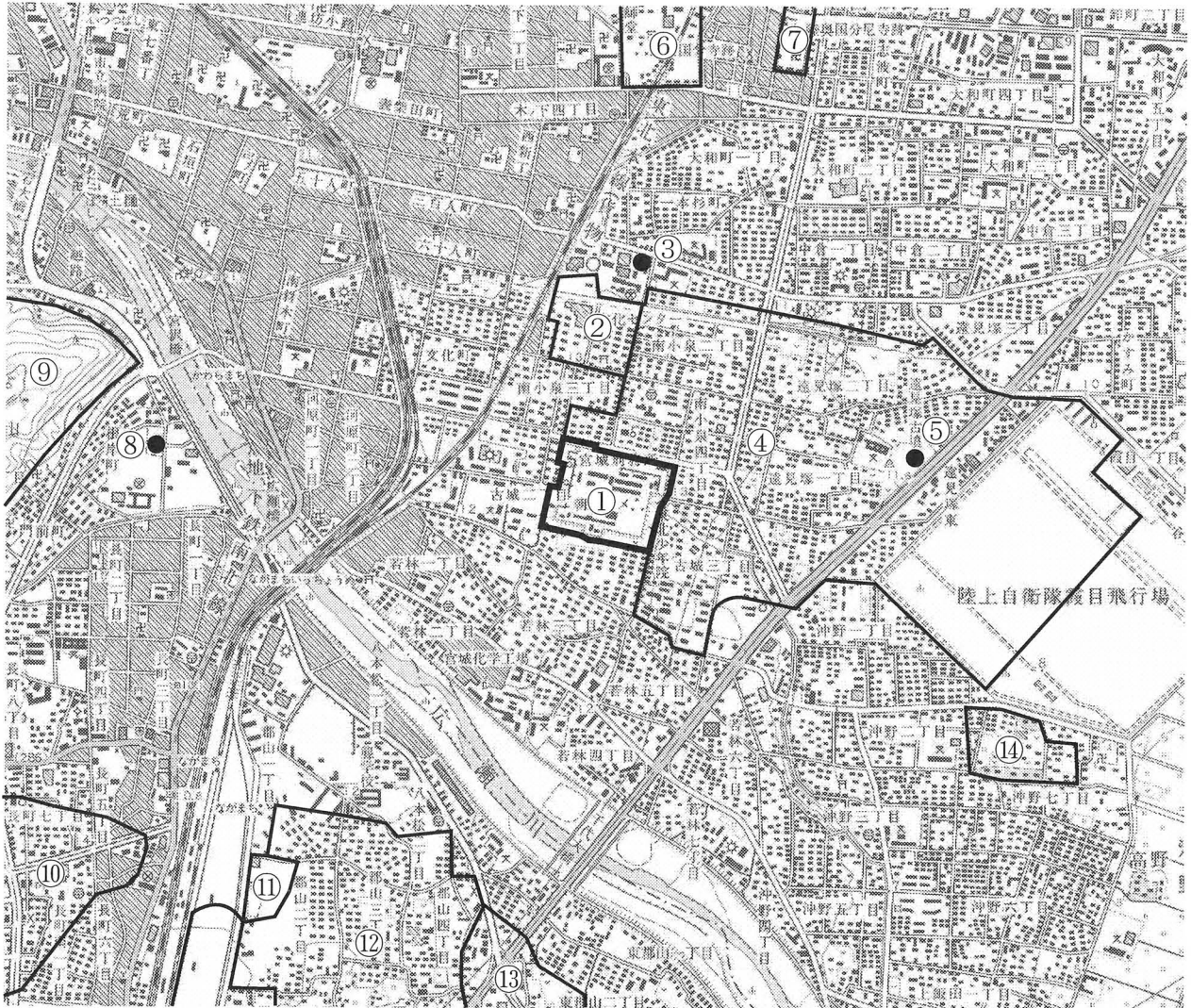
1 遺 跡 名	若林城跡（宮城県遺跡番号01030 仙台市遺跡番号C-511）
2 所 在 地	仙台市若林区古城2丁目3-1
3 調査原因	宮城刑務所全体改築に伴う調査
4 調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
5 調査担当	調査係主任 佐藤 淳 調 査 員 岡本範之（株式会社パスコ） 調 査 補 助 員 佐藤好司（株式会社パスコ）
6 調査期間	発掘調査 平成16年9月6日～11月5日
7 調査面積	調査対象面積 5,230㎡ 実調査面積 380㎡（1区・2区・試掘区）

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

若林城跡は、JR仙台駅の南東側約3kmに位置する。遺跡の規模は、東西約400m、南北350mで、周囲には土塁と堀が巡らされている。周辺地形は、西側には名取川の支流である広瀬川により形成された段丘地形が発達しており、この地を境に東側に広がる沖積平野へと変わっていく。

広瀬川左岸には自然堤防が形成され、背後には後背湿地が展開しており、ここには中小の埋没河川による旧河道とそれらに挟まれた微高地が入り組んでいる。若林城跡はこのような中に立地し、周辺の標高は11～14mである。



番号	遺跡名	種別	立地	年代	番号	遺跡名	種別	立地	年代
1	若林城跡	古墳・集落跡・城館跡	自然堤防	古墳・古代・中世・近世	8	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
2	義種園遺跡	居館跡・集落跡	沖積地	弥生・古墳・中世・近世	9	茂ヶ崎城跡	城跡	丘陵	中世
3	法領塚古墳	古墳	沖積地	古墳	10	富沢遺跡	水田跡他	自然堤防 後背湿地	旧石器～近世
4	南小泉遺跡	集落跡・城館跡 他	沖積地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	11	西台畑遺跡	包含地・集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
5	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	12	郡山遺跡	官衙跡・水田跡他	自然堤防 後背湿地	縄文・弥生・古墳・古代
6	陸奥国分寺跡	寺院	沖積地	古代・中世	13	北目城跡	城館跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
7	陸奥国分尼寺跡	寺院	沖積地	古代	14	神籬遺跡	官衙跡?	自然堤防	古代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 周辺の歴史的環境

若林城跡周辺は古くから市街地化が進んだことから、現在確認できる遺跡数はそう多くはなく、そんな中でも遺跡数や遺構数が増加するのは古代以降である。

縄文時代では隣接する南小泉遺跡において縄文土器の出土が確認されているが、遺構の検出には至っていない。周辺では海岸部に近い高田B遺跡で後期の竪穴住居跡が発見されている。

弥生時代では南小泉遺跡でかつて多くの合せ口土器棺が出土しているが、その後の度重なる調査においてもこの時期の遺構は殆ど発見されていない。東に位置する中在家南遺跡、押口遺跡、高田B遺跡では、河川跡などから中期の土器や木製品が大量に出土しており、貴重な資料となっている。また名取川南側の富沢遺跡では中期や後期の水田跡が重層的に発見され、これ以降も継続的に営まれている。

古墳時代では東側に前期の前方後円墳である遠見塚古墳があり、この地域の首長の墓と考えられる。その他横穴式石室を持つ法領塚古墳や若林城内にも円墳が発見されていることから、かつてこの地域に古墳群が形成されていたものと見られる。さらに名取川南側には平野部に多くの古墳や、丘陵部端に横穴墓群が形成される。

古代では遺跡北側に奈良時代に陸奥国分寺や尼寺が造立され、また南小泉遺跡などの周辺遺跡からは奈良時代から平安時代の数多くの竪穴住居跡が発見されたことから、当時の中心がこの地域にあったことがわかる。南東側には奈良時代の郷に関わる遺構が発見された神柵遺跡や、名取川南側には多賀城造営以前のかつての陸奥国府であった郡山遺跡がある。さらに東の低地部には仙台東郊条里跡に条里型地割りが確認されている。

中世では隣接する南小泉遺跡や養種園遺跡などで大規模な施設群が発見されている。中でも南小泉遺跡では国人領主層やその家臣クラスのものともみられる土塁や堀に囲まれた城館跡や屋敷跡が複数発見され、陶磁器などの出土遺物も多いことから、この地が戦国期以前の政治的中心であったものと考えられている。また養種園遺跡では数多くの土坑墓が発見されている。その他には名取川下流域に今泉城跡や沖野城跡があり、これらもまた戦国時代の領主クラスの城館跡と考えられている。

近世になると若林城の築城に伴い周辺には城下町が形成される。現在のこの地区の区画は当時の町割が基となっている。南小泉遺跡からは当時の城下にあった屋敷の遺構と見られるものが発見されている。伊達政宗の死後、城下の一部は仙台城下に組み入れられたが、多くは耕作地になったと考えられる。また養種園遺跡からは堀や土塁、井戸、門などの遺構と共に庭園を伴った屋敷跡が発見されており、これらは絵図に描かれた伊達家別荘と考えられている。

第3章 調査の経過と記録

1. 調査経過

4月に実施した試掘調査の結果では、今回の調査対象となる東西2棟の建物部分において、時期不明の整地層のほか、西側部分で遺構の可能性のある落ち込みや、東側部分で溝跡などが検出されていた。しかしながらこれらが若林城に関連するものかどうかは不明であった。今回の調査では過去の調査の成果から、古代の遺構調査が主となることを想定し、西側を1区、東側を2区としてそれぞれ150㎡程度の調査区を設定したが、これはあくまでも遺構が検出された地区を中心に設定したもので、調査の結果次第では調査区の拡張を視野に入れたものであった。

調査は刑務所側の作業管理の都合上、1区より開始したところ、IV層整地層上面において検出した礎石跡などの遺構群が若林城関連の施設である可能性が強いとの考えに至ったことから、一部を除いて遺構の掘り込みは行わず、作業を中断し、2区の調査に移行した。2区においては近年の著しい攪乱が確認されたが、一部において1区同様の整地層や礎石跡と見られる遺構群が検出された。これらの遺構群についても若林城を構成した建物跡の可能性

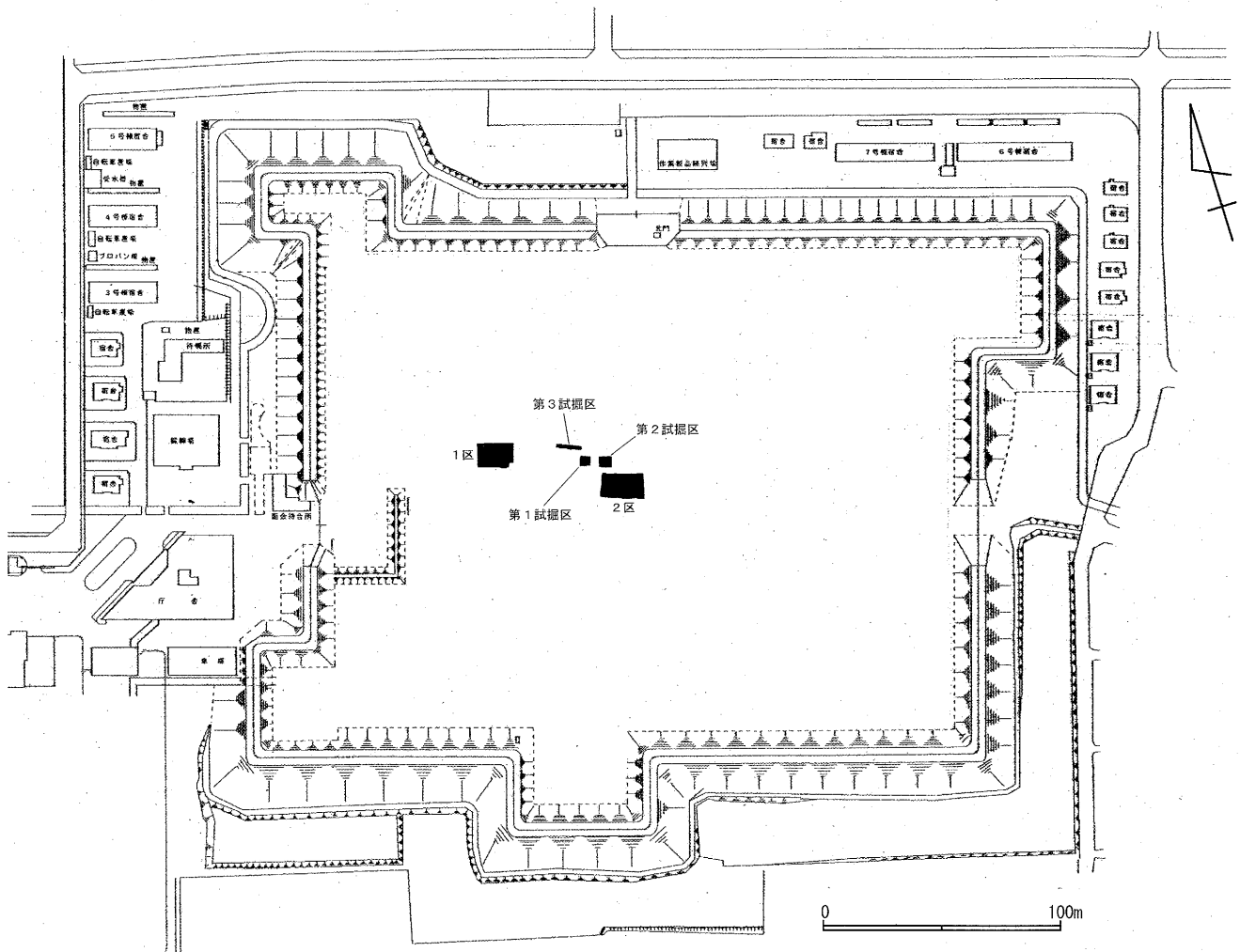
が強いものと考えられたが、調査区の状況や今後の建築計画を鑑み、刑務所側との協議の結果、2区についてはこれらの遺構面や下層遺構について調査を終了させることを目的に、当初の期間を2週間延長し調査を継続した。

2区の調査においては遺構の範囲を確認すべく東側を拡張し、同時に2区の北西側に3か所の試掘区（第1～3試掘区）を設定し遺構の広がりを確認した。その結果、全ての地区から同様の整地層と共に、礎石跡や雨落ち溝跡、敷石遺構などが検出されたことから、刑務所側と再度の協議を重ね、今回の調査については1区・2区共に若林城期と考えられる遺構の掘り込みは行わず、次年度に予定建物範囲全域を対象とした調査を行なうこととし、調査を終了した。

2. 調査記録

調査にあたっては、日本測地系直角平面座標系第X系に基づき、GPSによりデータを取得し、1・2区内に5m間隔でグリッドを設定した。また水準点は刑務所外の仙台市道路部設置の基準杭より移設、使用した。遺構平面図はトータルステーションにより作成し、断面図は手実測を基本に一部トータルステーションを使用した。写真による記録は35mmカメラを使用し、モノクロ、カラーリバーサルフィルムを用いた。また高画素デジタルカメラによる通常記録に加え、デジタル測量用の撮影を行い、後に図化した。

遺構番号については、1区については検出順に遺構種別ごとに番号を付け、掘り込みを行なったが、掘り込み記録した遺構は礎石跡の一部や近世以降のものとみられる小ピットなどである。2区はⅡ・Ⅲ層面検出遺構に1区に続く番号を付け、これらを掘り込んでいった。但し今後周辺地区を含めた調査により、遺構名や番号が変更する可能性がある。



第2図 調査区位置図

第4章 基本層序

層序は、全体に第Ⅰ層から第Ⅵ層までの大別6層・細別9層に分層される。

第Ⅰ層は表土層である。中には施設改築によるコンクリートブロック、玉石等も混入し、部分的に大きな攪乱がみられる。

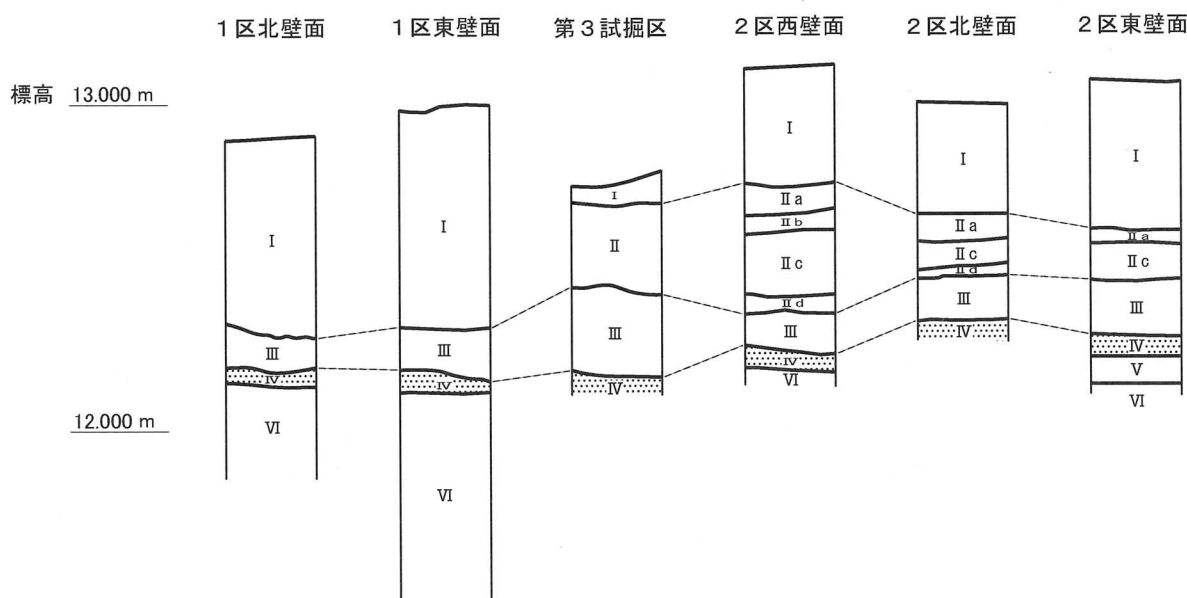
第Ⅱ層は、近代以降の刑務所にかかわる整地層とみられ、4層に細分している。1区では、この層がすでに攪乱されており、表土層と一体化している。もっとも良好に確認できたところは2区であり、Ⅱa～Ⅱdの4層に細分された。全体的に黄色がかかったシルト質で人為的にたたきめられたように硬化している。各層には濃淡が認められる。第1試掘区～第3試掘区においても本層は確認されたが細分はできなかった。

第Ⅲ層は若林城以後の近世の畑耕作土とみられる。黒褐色のシルトで、上面はグライ化して灰色になっていることが多い。試掘区においてはしまりがなく土壌となっている。

第Ⅳ層は若林城にかかわる整地層と考えられ、1区・2区・第1試掘区～第3試掘区のすべての地区に安定的に広く存在していた。1区より検出された礎石建物跡、2区の雨落ち溝跡など、若林城関連と推定される遺構が本層上面より検出されている。遺構の残存状況から層上半は耕作等によりⅢ層化しているものとみられる。

また2区の東側のみに確認した第Ⅴ層は旧表土の可能性はある。今回の調査では、第Ⅴ層より下は調査対象外とし、掘り込みは行っていない。

第Ⅵ層は自然堆積層と考えられる。1区において攪乱坑の断面や試掘区の断面から、北から南に向かって傾斜する自然堆積層が数層観察することができた。ただ、2区の攪乱坑より観察できた自然堆積層とは大きく異なるところがあり、全容の把握までには至っておらず、今回の調査ではⅤ層以下の自然堆積層をすべてⅥ層として把握することにした。



層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
I	表土	—	—	III	10VR3/2	黒褐シルト	シルト 上面がグライ化する、黄褐色粒子を含む
IIa	2.5Y7/3	浅黄シルト	シルト 黄褐シルトを含む	IV	10VR5/4	にぶい黄褐シルト	シルト 黄褐色ブロックを含む
IIb	10YR3/2	黒褐シルト	シルト 全体にグライ化する箇所多い、黄褐色粒子若干含む	V	10YR3/1	黒褐シルト	シルト 黄褐色ブロック・黒褐色ブロックを均一に含む
IIc	2.5Y7/3	浅黄シルト	シルト 黄褐シルトを含む、鉄分沈殿あり	VI	10TR5/4	にぶい茶褐シルト	シルト 自然堆積層
IId	2.5Y5/4	黄褐シルト	シルト 黄褐ブロック含む、2～3cm大の礫含む				

第3図 基本層序

第5章 検出遺構と出土遺物

1. 1区の遺構と遺物

1区の遺構は、若林城期の礎石建物跡と思われる遺構が検出された後に発掘調査の方針が変更されたことから、検出遺構については以下のような状況で調査を終了している。

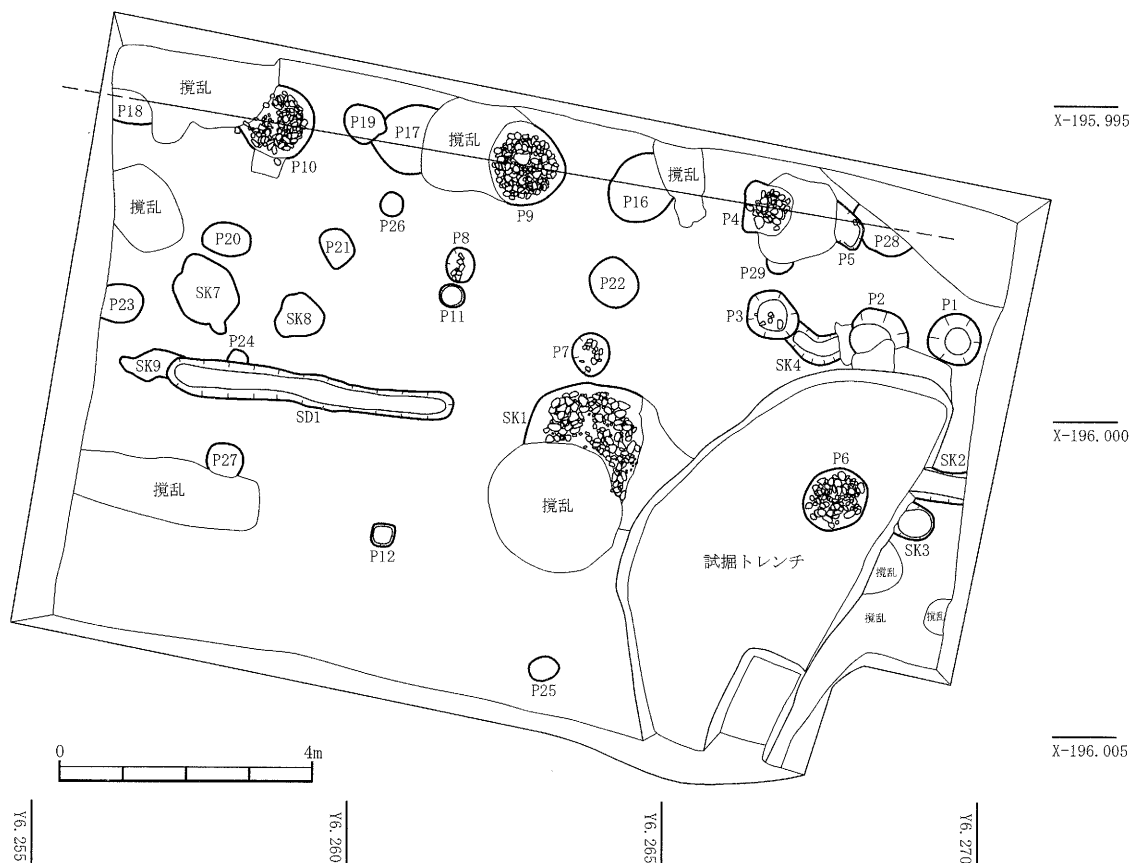
- ①完掘した遺構 (SK2～SK4・SD1・P1～P3・P5・P11・P12)
- ②半裁段階のもの (P6～P8)
- ③礫を敷設したもので礫上面を確認したもの (SK1・P4・P9・P10)
- ④検出のみしたもの (SK7～SK9・P16～P29)

礎石建物跡

1区北側から径80cm～130cmほどの円形の礎石跡を検出した。実際に精査をし、礎石跡として確定できたもの(P4・P9・P10)と、柱間寸法と軸線から同一建物の礎石跡として認識されるもの(P28・P16・P17・P18)がある。合計で7基である。前者には掘り方に拳大の円礫を根固め石として充填しているが、礎石はすべて抜き取られていて検出できなかった。図上での規模は東西12.9mとなり、さらに東西方向に延びる可能性がある。

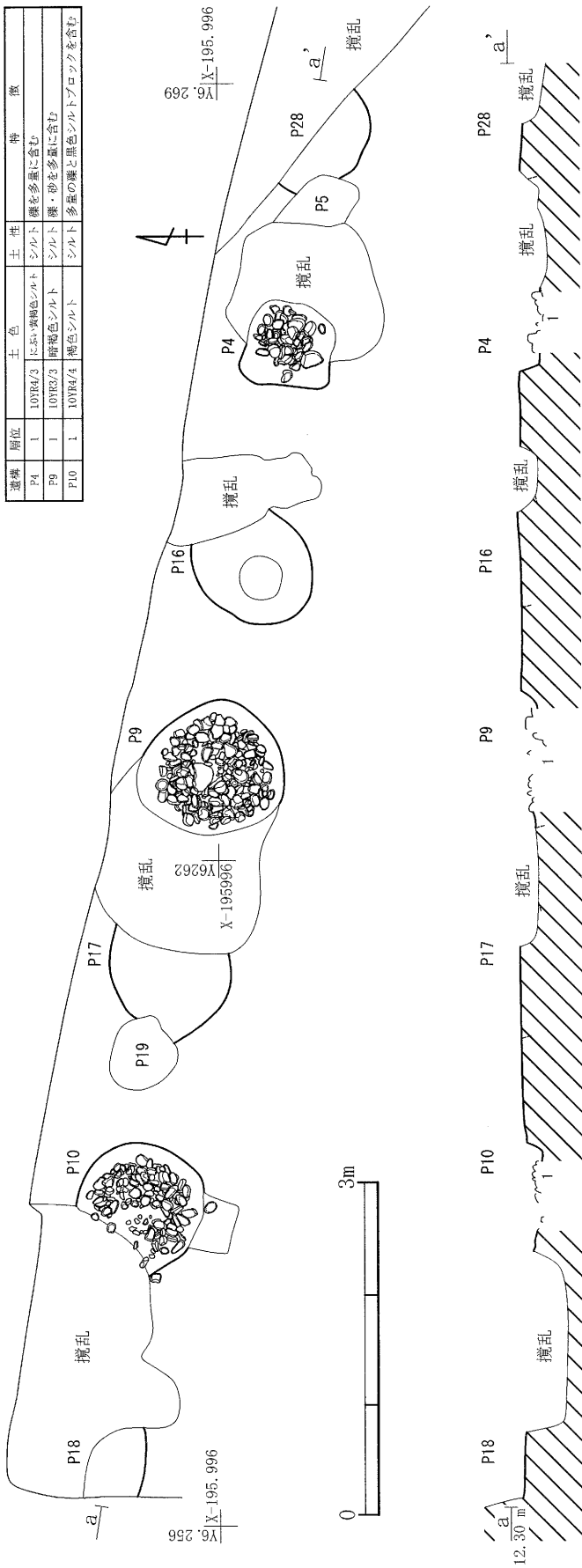
P4 礎石跡

平面形はやや不正形状をなし、東側を攪乱で壊されている。南北東西ともに80cmほどで、径5cm～10cmの円礫が充填されている。出土遺物は無かった。



第4図 1区 III・IV層上面検出遺構

遺構	層位	土色	土性	特徴
P4	1	10YR4/3 濃い茶褐色シルト	シルト	礫を多量に含む
P9	1	10YR3/3 暗褐色シルト	シルト	礫・砂を多量に含む
P10	1	10YR4/4 褐色シルト	シルト	多量の礫と黒色シルトブロックを含む



第5図 礎石建物跡

P9 礎石跡

平面形はほぼ円形をなし、西側を攪乱で壊されている。径125cmほどで、径5cm～15cmの円礫が充填されている。中央にやや大き目の礫が置かれ周囲よりややくぼんでいる。出土遺物は無かった。

P10 礎石跡

平面形はほぼ円形と見られ、西側を攪乱で壊されている。径115cmほどで、径5cm～15cmの円礫が充填されている。中央部は礫が失われているものとみられ、くぼんでいる。出土遺物は無かった。

その他、P16には検出面上で円形のプランが確認でき、礎石痕の可能性はある。

土坑

SK1 土坑

1区中央で検出し、重複は無い。南側と東側を木根による攪乱を受けている。形態は円形の可能性があり、規模は南北不明、東西180cm以上、深さ50cmである。堆積土中から多量の礫が出土している。底面及び壁面に径5～10cmの礫が敷かれた状況が確認されており、堆積土中の礫はこれらが攪乱などにより動いたものとみられる。出土遺物は土師器・土師質土器・丹波産の挿鉢（第8図1）・平瓦・丸瓦・軒平瓦（第8図2）がある。

SK2 土坑

1区東側で検出し、重複は無い。形態は不明であるが東西に長い形をなしている。規模は東西は不明、南北46cm、深さ36cmである。底面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は土師質土器がある。

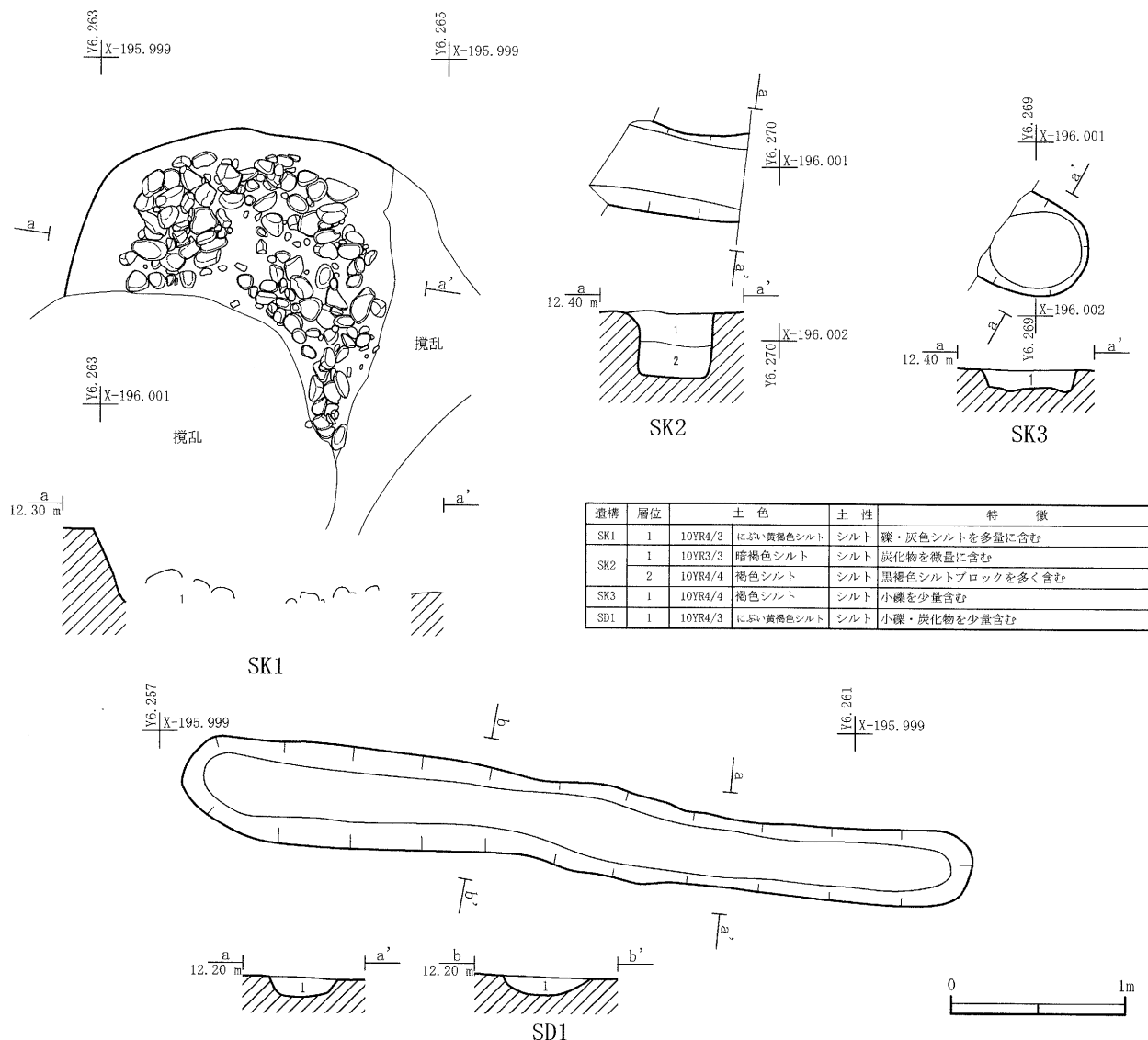
SK3 土坑

1区東側で検出し、重複は無い。形態は楕円形で、規模は長軸62cm、短軸61cm、深さ14cmである。底面は平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で、小礫を少量含んでいる。出土遺物は土師器がある。

溝跡

SD1 溝跡

1区西側で検出した東西方向の溝跡で、重複関係はP24を切っている。確認長は4.4m、上端幅50cm、



第6図 土坑・溝跡

深さ12cm程度で、直線的に延びる。方向はN-83° -Wである。断面形はゆるいU字形で壁面の立ち上がりは緩い。堆積土中に小礫・炭化物を少量含んでいる。出土遺物は堆積土より土師質土器・平瓦がある。

ピット

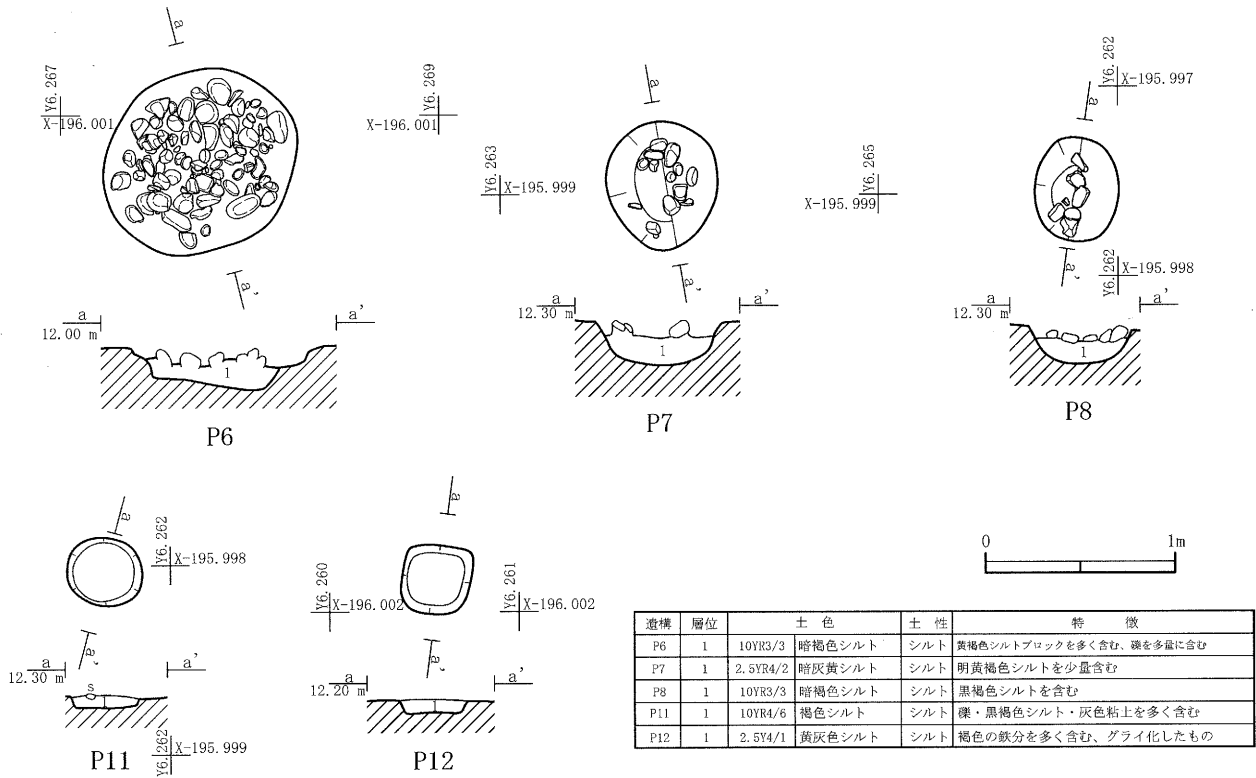
1区北半部で多く検出した。P6は礎石跡の可能性も考えられるものであるが、他のものと比べ掘り込みが深く、周辺にはこれと組むプランは検出できなかった。またP22・P8・P21・P20は北側に位置する礎石建物跡と関連した柱穴列として認識できる可能性がある。(第1表)

P6 ピット

1区東側の試掘トレンチ内で検出し重複は無い。形態は円形で、規模は径98cm、深さ25cmであるが、IV層上面からの深さは50cm程度である。底面はほぼ平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で黄褐色シルトブロックを含んでいる。中央に広く円礫が多数充填されており、比較的全体に均一にみられた。出土遺物は無かった。

P7 ピット

1区中央で検出し、重複は無い。形態は楕円形と見られ、長軸67cm、短軸57cm、深さ24cmである。底面は舟底状で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で暗灰色シルトである。堆積土より礫が少量出土している。礫が同一レベルから出土しているところからみて混入ではなく、何らかの機能を果たしたものと考えられる。出土遺物



第7図 ピット

は無かった。

P8 ピット

1区中央で検出し、重複は無い。形態は楕円形で、長軸53cm、短軸43cm、深さ20cmである。底面は舟底状で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で暗褐色シルトである。堆積土上層より礫が5点出土している。P7同様に礫が同一レベルから出土しているところからみて、何らかの機能を果たしたものと考えられる。出土遺物は土師質土器がある。

P11 ピット

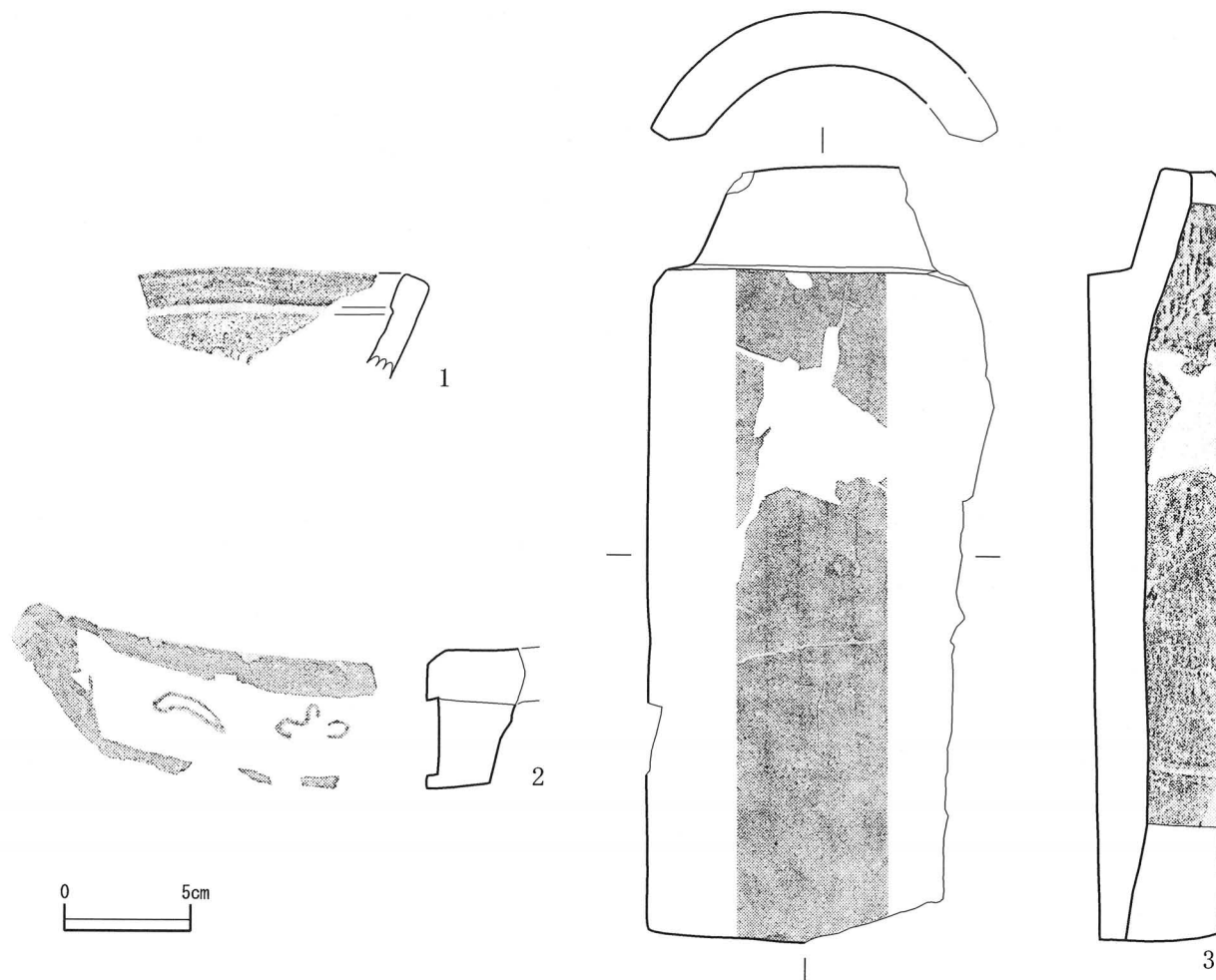
1区中央で検出し、重複は無い。形態は円形で、規模は径38cm、深さ7cmである。底面はほぼ平坦で壁面は急に立ち上がる。堆積土は褐色シルトの1層で層中より礫が出土しているが、その性格は不明である。出土遺物は無かった。

P12 ピット

1区中央で検出し、重複は無い。形態は不整形で、南北36cm、東西36cm、深さ9cmである。底面は平坦で、壁面は急に立ち上がる。堆積土は1層で褐色の鉄分を含んでグライ化している。出土遺物は無かった。

ピット番号	規模 (cm)	特徴	重複関係	ピット番号	規模 (cm)	特徴	重複関係
1	83 × 81 × 13	円形、時期は近代以降		17	114 × - × -	円形、礎石建物跡の礎石跡	
2	94 × 73 × 17	不整形円形、時期は近代以降	SK4を切る	18	(100) × - × -	円形? 礎石建物跡の礎石跡	
3	81 × 74 × 13	不整形円形、時期は近代以降	SK4を切る	19	70 × 59 × -	不整形円形	P17を切る
4	75 × 72 × -	不整形円形、礎石建物跡の礎石跡		20	77 × 52 × -	楕円形	
5	- × 46 × 7	不整形円形、時期は近代以降	P28を切る	21	64 × 58 × -	不整形円形	
6	101 × 94 × 25	円形、礎石跡?		22	79 × 78 × -	不整形円形	
7	81 × 74 × 13	楕円形、礫を少数伴う		23	61 × - × -	不整形円形	
8	81 × 74 × 13	楕円形、礫を少数伴う		24	33 × - × -	円形?	SD1に切られる
9	130 × 114 × -	円形、礎石建物跡の礎石跡		25	47 × 37 × -	不整形円形	
10	116 × 113 × -	円形、礎石建物跡の礎石跡		26	38 × 36 × -	円形	
11	40 × 36 × 7	円形		27	58 × - × -	円形	
12	40 × 36 × 7	方形		28	101 × - × -	円形? 礎石建物跡の礎石跡	P5に切られる
16	116 × (98) × -	楕円形、礎石建物跡の礎石跡		29	42 × 36 × -	円形?	

第1表 1区 ピット一覧表



図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	器種	法量 (mm)			産地・年代	特徴・調整など	写真番号
						口径	底径	器高			
1	I1	1	SK1(埋土)	陶器	摺鉢	-	-	-	丹波・17c前半	焼き締め 口縁部内面は折返 内面にわずかにおろし目あり	5-7
図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	器種	法量 (mm)			特 徴	写真番号	
						長さ	幅	厚さ			
2	G1	1	SK1(埋土)	軒平瓦	-	-	20	瓦当面の文様は剥落している	桔梗唐草文?	5-3	
3	F1	1	I層	丸瓦	306	(140)	20	玉縁	裏面に粗い布目あり	5-1	

第8図 1区 出土遺物

2. 2区の遺構と遺物

(1) II層上面の遺構と遺物

全体に中央部や南側を中心にして現代の大きな攪乱坑が随所に穿たれ、破壊が著しい。II層面においては、北東側に遺構が集中しており、土坑やピットを検出した。

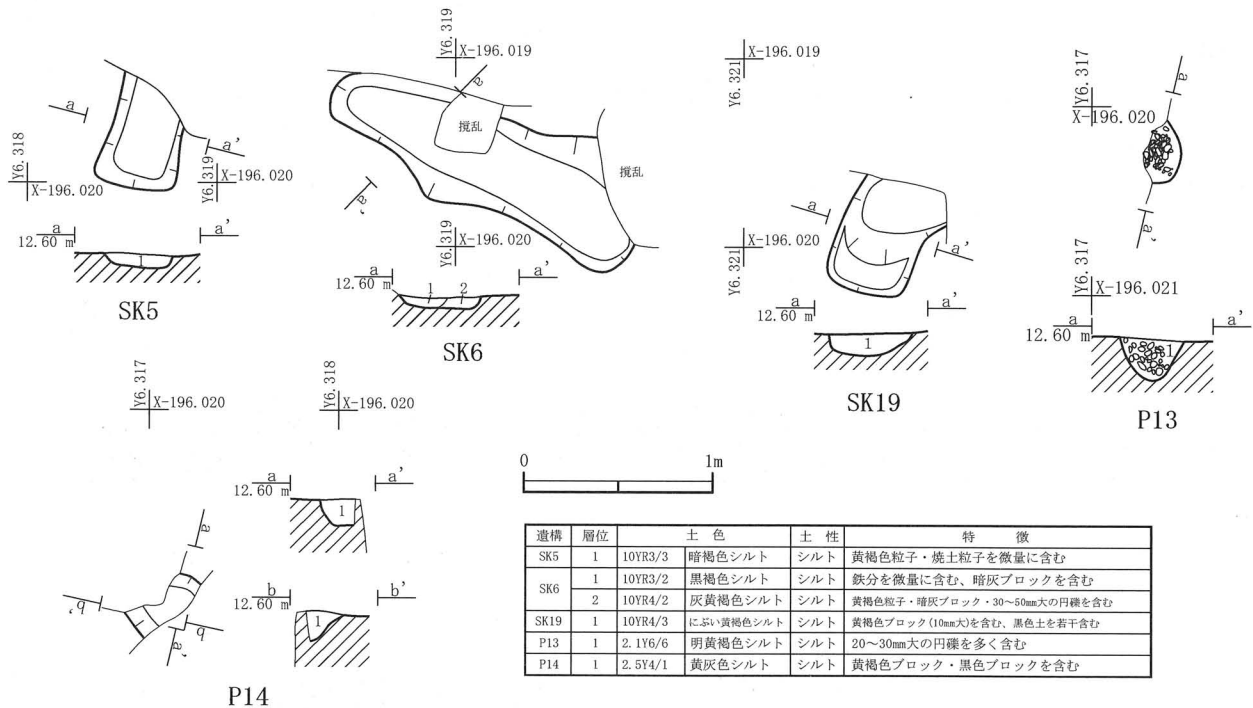
土坑

SK5 土坑

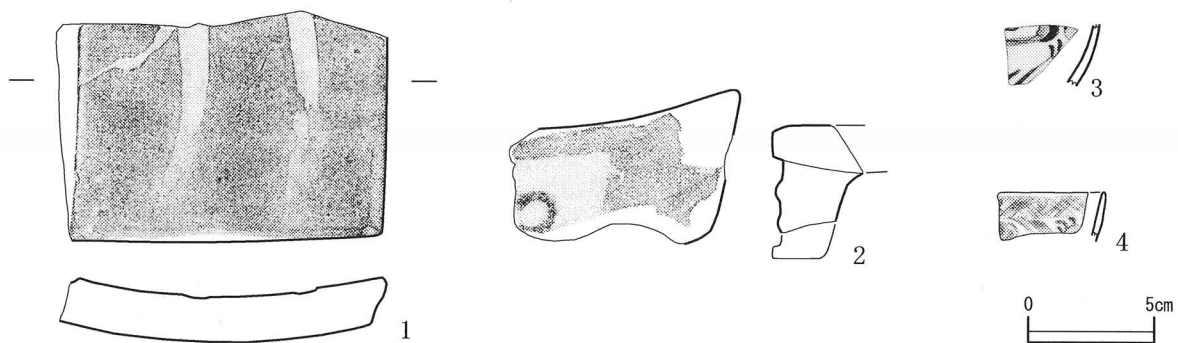
2区北東側で検出し、SK6に切られている。形態は不整長方形をなし、長軸不明、短軸43cmである。底面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は黄褐色粒子・焼土粒子を微量に含んでいる。出土遺物は土師器がある。

SK6 土坑

2区北東側で検出し、SK5を切っている。形態は東西に長い溝状をなしている。全長178cm、幅53cm、深さ7cmほどである。底面はやや凹凸があるが平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は2層に分層された。堆積土には3~5cm大の円礫を含んでいた。出土遺物は土師器・土師質土器・平瓦・丸瓦がある。



第11図 II層上面土坑・ピット



図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	法量 (mm)			特徴	写真番号
					長さ	幅	厚さ		
1	H2	2	I層	熨斗瓦	-	-	17	表面に沈線・水切りあり 表裏面ともナデ	5-5
2	G3	2	II層	軒平瓦	-	-	20	三ツ葉唐草文?	5-2

図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	器種	法量 (mm)			型式・年代	特徴・調整など	写真番号
						口径	底径	器高			
3	J1	2	II層	磁器	染付碗	-	-	-	中国?	山水文?	5-12
4	J2	2	II層	磁器	染付碗	-	-	-	中国?	草花文?	5-13

第12図 2区 I・II層出土遺物

は無かった。

ピット

P13 ピット

2区北東側で検出し、重複は無い。西側を大きく攪乱で壊されている。形態は円形と見られ、径26cm、深さ18cmである。底面は小さく凹面で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は明黄褐色シルトである。堆積土中に2~3cm大の円礫を多く含んでいた。礫は意識的に充填されているものとみられる。出土遺物は無かった。

P14 ピット

2区北東側で検出し、重複は無い。北西側と南東側を大きく攪乱で壊されている。形態は円形または楕円形と見

られ、径は不明、深さ12cmである。底面は緩く凹面で、壁は斜めに立ち上がる。堆積土は黄褐色ブロック・黒色ブロックを含んでいた。出土遺物は平瓦がある。

(2) Ⅲ層上面

Ⅲ層面においても北東側に遺構が集中しており、土坑・溝跡・ピットが検出されている。また西側端においても土坑が検出されている。

土坑

SK10 土坑

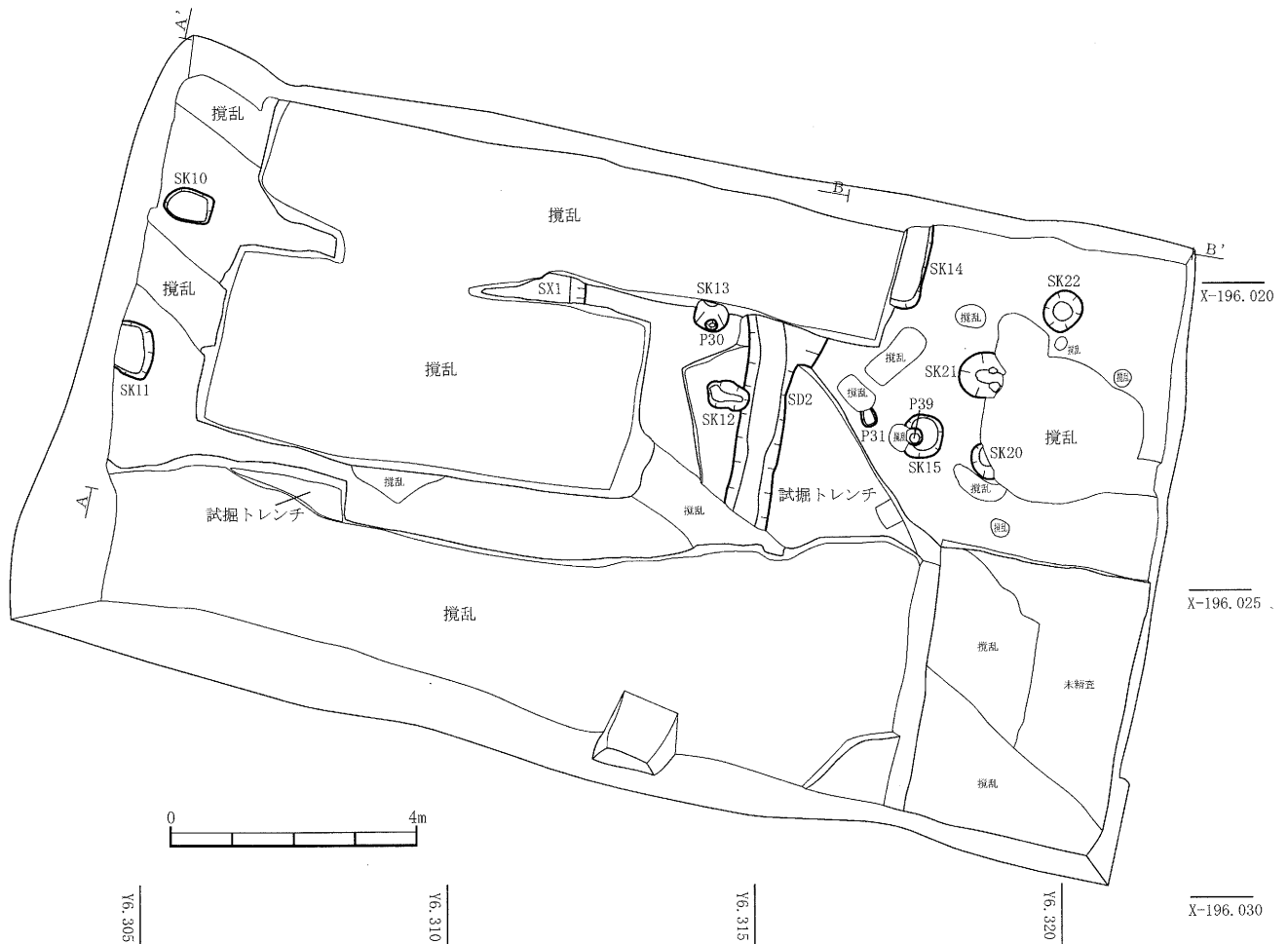
2区北西側で検出し、重複関係は無い。形態は不整形とみられ、規模は長軸78cm、短軸51cm、深さ11cmである。底面は平坦で壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は1層で、小礫・炭化物を少量含む。出土遺物は平瓦がある。

SK11 土坑

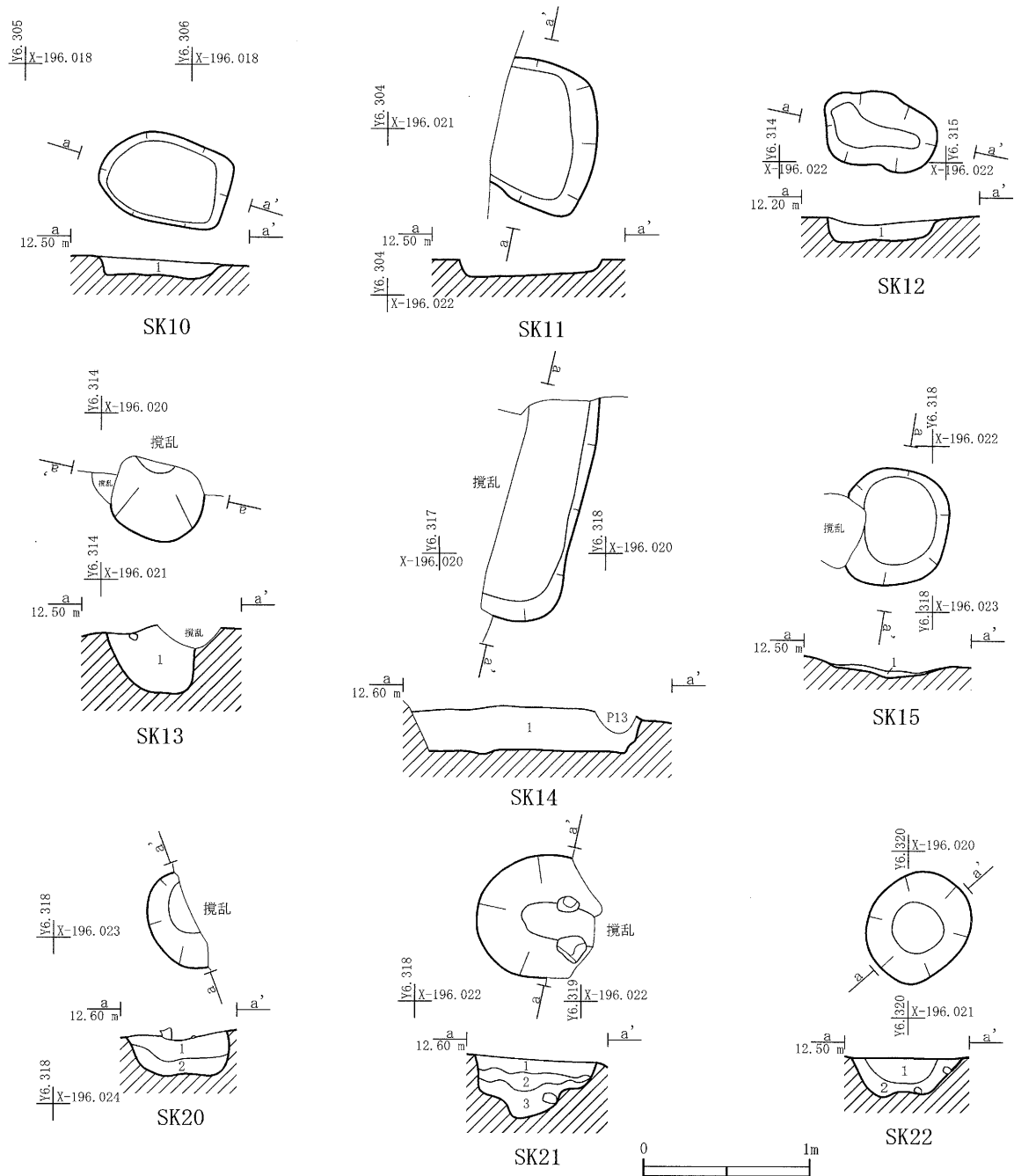
2区西端側で検出し、重複関係は無い。西側が壁面にかかる。形態は不整形で規模は南北84cm、東西66cm、深さ8cmである。底面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は1層で黄褐色粒子を多く含む。出土遺物は瓦がある。

SK12 土坑

2区中央で検出し、SD2を切っている。形態は不整楕円形で、規模は長軸70cm、短軸43cm、深さ17cmである。底面は舟底状で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で、下層に砂粒を多く含んでおり、全体に軟弱である。出土遺物は無かった。



第13図 2区 Ⅲ層上面検出遺構

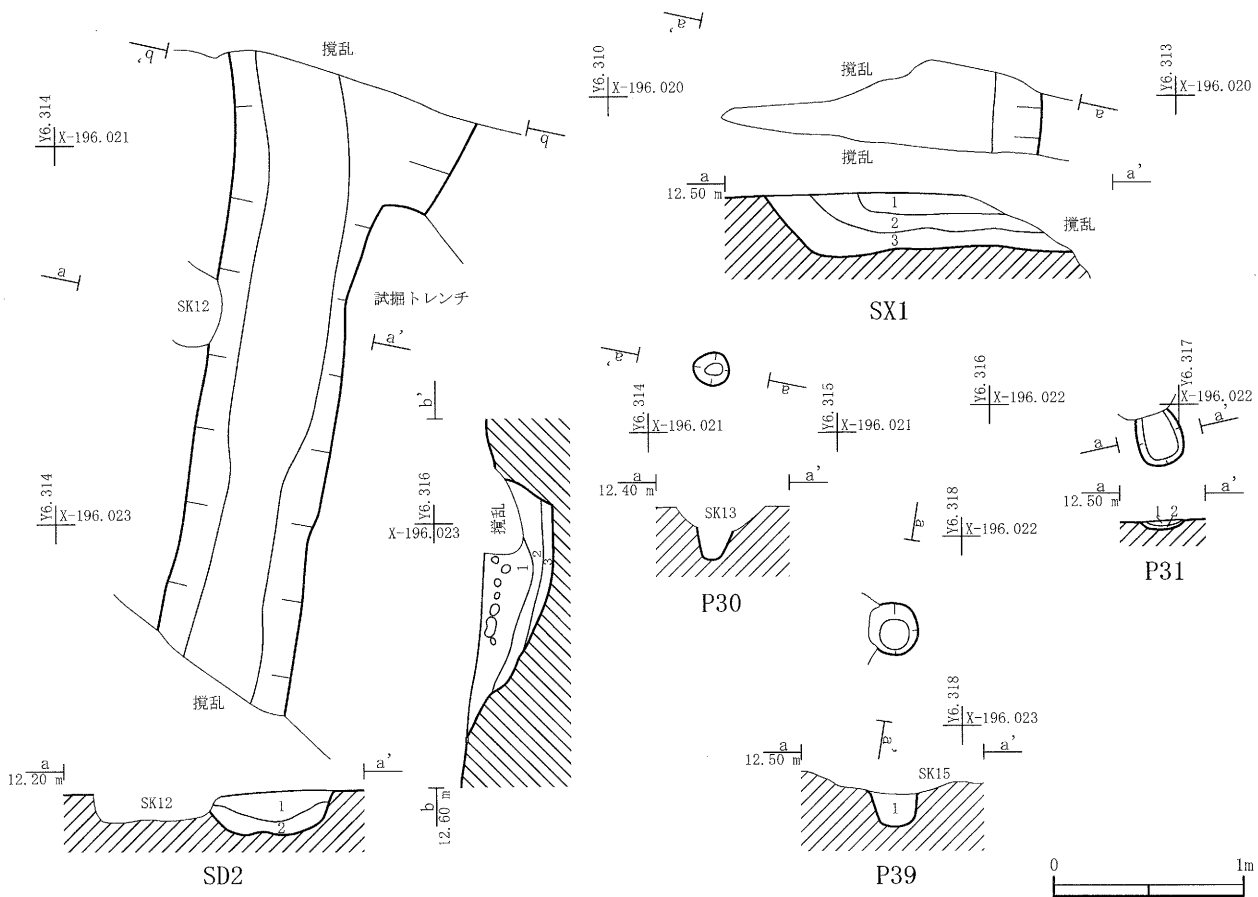


遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴		
SK10	1	10YR3/4	暗褐色シルト	シルト	小礫・炭化物を少量含む	SK21	2	10YR4/2	灰黄褐シルト	シルト	黄褐色ブロック、黒色ブロック(10mm大)を含む
SK11	1	10YR3/2	黒褐シルト	シルト	黄褐色粒子を多く含む		1	10YR3/3	暗褐シルト	シルト	灰質ブロック(5mm大)を含む
SK12	1	10YR4/4	褐色シルト	シルト	下層に砂粒を多く含んでいる、全体に軟弱		2	10YR3/2	黒褐シルト	シルト	黄褐色粒子を多く含む
SK13	1	10YR4/2	灰黄褐シルト	シルト	黄褐色ブロック(5~30mm大)を含む	SK22	3	10YR4/3	におい黄褐色シルト	シルト	黄褐色粒子・ブロック(5~10mm大)を多く含む
SK14	1	10YR3/2	黒褐シルト	シルト	白色粒子を含み、炭化物粒子を微量含む		1	10YR3/4	暗褐シルト	シルト	黄褐色粒子を含む、炭化物粒子を多く含む
SK15	1	5Y4/1	褐灰シルト	シルト	全体にグライ化し、上面は鉄分が沈着し、黄褐色粒子を多く含む		2	10YR3/3	暗褐シルト	シルト	黄褐色粒子・ブロック(5mm大)を含む、炭化物粒子を含む
SK20	1	10YR3/3	暗褐シルト	シルト	黄褐色ブロックと粒子を含む						

第14図 Ⅲ層上面土坑

SK13 土坑

2区中央で検出し、P30を切っている。また北側半分を攪乱で壊されている。形態は円形と見られ、規模は径60cm、深さ32cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は1層で、黄褐色ブロック(5~30mm大)を含む。出土遺物は土師器がある。



遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴		
SX1	1	2.5Y5/4	黄褐色シルト	シルト	SD2	2	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	シルト	灰シルトブロックを含む	
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐砂質	シルト		20mm大の礫を含む	3	10YR3/2	暗褐色シルト	シルト	灰シルトブロックを多く含む
	3	10YR3/2	暗褐色シルト	シルト		白色粒子を多く、20mm大の礫を密に含む	P31	1	5Y4/1	褐灰シルト	シルト
SD2	1	10YR3/2	暗褐色シルト	シルト	炭化物粒子を含む、比較的均一、円礫を含む	P39	1	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	シルト	黄褐色ブロック (10mm大) を含む、炭化物粒子を微量含む

第15図 Ⅲ層上面溝跡・性格不明遺構・ピット

SK14 土坑

2区北東側で検出し、重複関係は無い。北側は壁面にかかり、西側を攪乱で壊されている。形態は隅丸の長方形と見られ、長軸146cm、短軸不明、深さ25cmである。底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。堆積土は全体にグライ化し、上面は鉄分が沈着し、黄褐色粒子を多く含んでいる。出土遺物は無かった。

SK15 土坑

2区東側で検出し、P39を切っている。形態はほぼ円形で、規模は径72cm、深さ7cmである。底面から壁面にかけて緩く湾曲する。堆積土は全体にグライ化している。出土遺物は平瓦・丸瓦がある。

SK20 土坑

2区北東側で検出し、重複関係は無い。北東側を攪乱で壊されている。形態は円形と見られ、径53cm、深さ22cmである。底面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。堆積土は2層で、黄褐色ブロックを含んでいる。出土遺物は鉄製品がある。

SK21 土坑

2区北東側で検出し、重複関係は無い。東側を攪乱で壊されている。形態は楕円形と見られ、長軸80cm、短軸73cm、深さ34cmである。底面は舟底状で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分層された。堆積土中より拳大の礫が2点が出土した。出土遺物は無かった。

SK22 土坑

2区北東側で検出し、重複関係は無い。形態は楕円形で、長軸67cm、短軸57cm、深さ27cmである。底面は舟底状で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層された。出土遺物は土師質土器・中国産と見られる染付碗・平瓦がある。

溝跡

SD2 溝跡

試掘より検出していた遺構で、2区中央で検出し、SK12に切られている。南北方向に伸び北側と南側を攪乱で壊されている。中央部付近で幅72cm、深さ25cmである。方向はN-11° -Eである。堆積土は3層に分層された。出土遺物は土師器・須恵器・土師質土器・平瓦・丸瓦・鉄製品がある。

性格不明遺構

SX1 性格不明遺構

2区中央で検出し、重複関係は無い。北・西・南側を攪乱で壊されているため残存はわずかで、形態は不明である。出土遺物は無かった。

ピット

P30 ピット

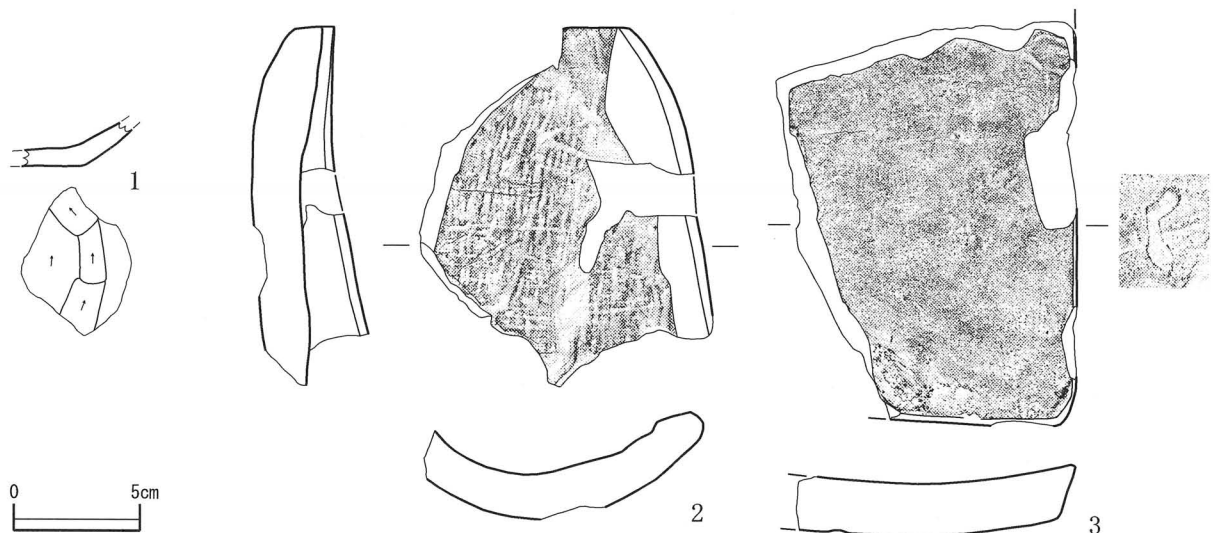
2区中央で検出し、SK13に切られている。形態は円形で、径18cm、深さ17cmである。出土遺物は土師器がある。

P31 ピット

2区北東側で検出し、北西側を攪乱で壊されている。形態は不整楕円形とみられ、規模は長軸不明、短軸25cm、深さ5cmである。堆積土は1層で、グライ化し鉄分が沈着している。出土遺物は無かった。

P39 ピット

2区北東側で検出し、SK15に切られている。形態は円形で、径28cm、深さ20cmである。堆積土は1層で、黄褐色ブロック(1cm大)および炭化物粒子を含んでいる。出土遺物は無かった。



図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	器種	法量(mm)			産地・年代	特徴・調整など	写真番号
						口径	底径	器高			
1	I5	2	III層	土師質土器	皿	-	-	-		ロクロ使用 体部下半・底部にヘラケズリ	5-10

図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	法量(mm)			特徴	写真番号
					長さ	幅	厚さ		
2	H1	2	III層	輪違い	-	-	19	裏面に粗い布目 表面ナデ	5-6
3	G4	2	III層	平瓦	-	-	21	凸面にヘラ記号らしきものあり	5-4

第16図 2区 III層出土遺物

P36 礎石跡

2区西端で検出し重複は無い。西側1/3が調査区外となり、北側は攪乱で壊されている。形態は円形で、規模はP35同様径60cm程度と推定される。5cm～10cm大の円礫が多数充填されている。P35とP36は、その規模や方向性から同一の建物を構成する礎石跡と考えられ、建物は北西側を中心に展開するとみられる。

3. 試掘区の遺構と遺物

(1) 第1試掘区

IV層上面において調査範囲の中央から南側にかけて土坑1基、溝跡1条、ピットが計4基が検出された。

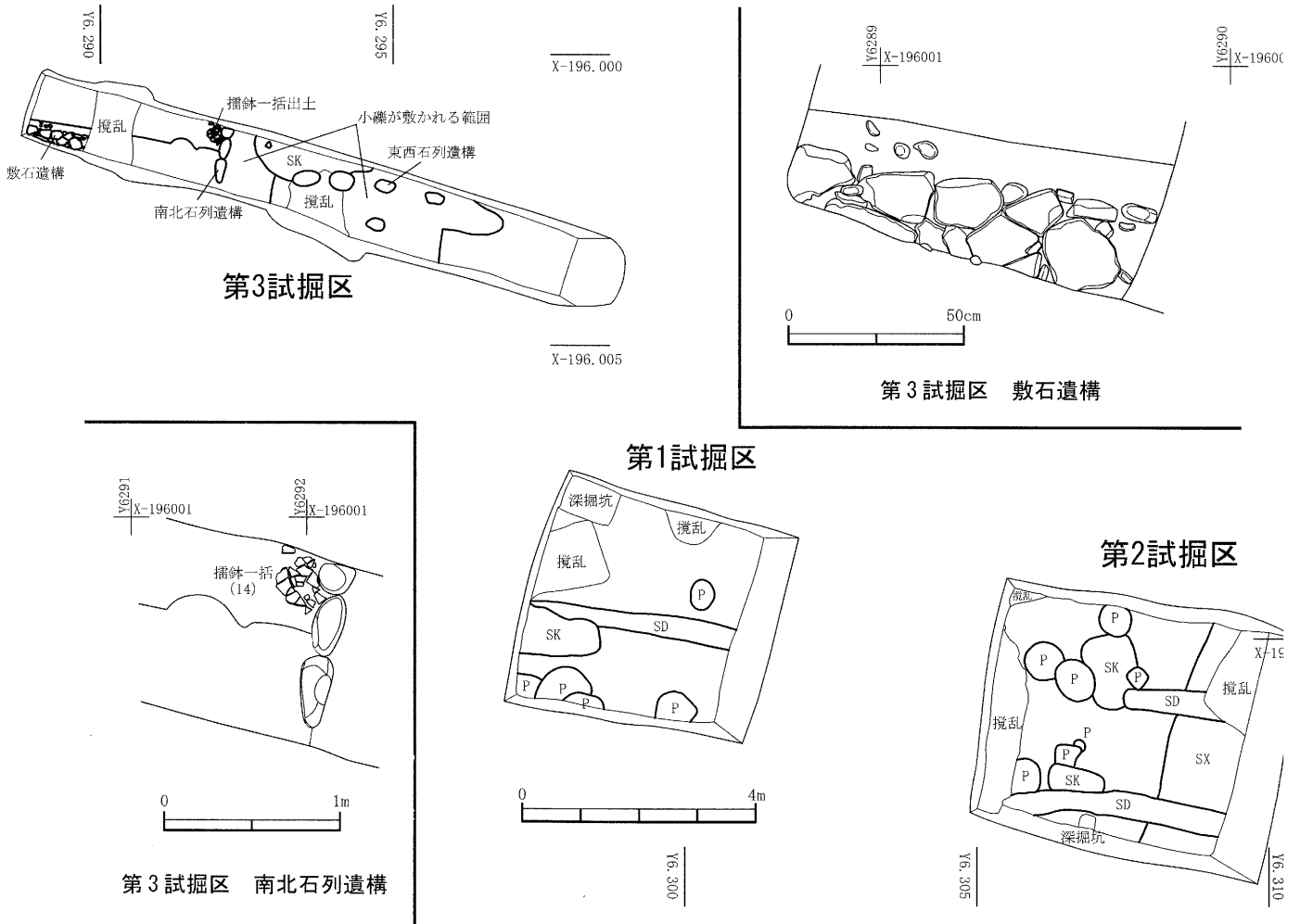
土坑は規模は長軸不明、最大幅105cmで、形態は不定形な長方形をなしている。

溝跡は中央に1条検出され、西側を土坑に切られている。東西方向に伸び、幅は30cm程度である。

ピットは中央北東側に1基、南東側に1基、南西側に3基検出されている。この内3基は礫が伴っている。これらはちょうど直角方向に配置されているように見受けられ、建物の礎石跡になる可能性も考えられる。また、南東側のピットの検出面より肥前染付皿（第19図1）が出土している。南西側のピットは、3基のピットの重複と考えられ、その内中央のものは、礎石痕と思われるプランも観察された。

(2) 第2試掘区

IV層上面において調査範囲のほぼ全面に遺構が検出されている。溝跡2条、土坑2基、性格不明遺構1基、ピットが計7基である。



第18図 第1～3試掘区 IV層上面検出遺構

土坑は北側に1基、南側に1基検出されている。北側のものはピットや溝跡に切られ、遺構の順序としては古く位置づけられる。形態は不整形をなしている。南側のものは、南側を溝跡に切られ、北側のピットを切っている。形態は不整形と見られ、規模は北側のものより小さい。

溝跡は中央に1条、南側に1条検出されている。双方の溝跡ともこの試掘区の遺構の中では最も新しい時期のものである。堆積土の状況からみてⅢ層に関わるものである可能性もある。

性格不明遺構は、調査区の東側1/3を占める大きなもので、形態は不明であるが、少なくとも一辺は直線的である。何かしら大規模な施設であることも考えられる。検出面上からは多量の瓦片が散布している状態が観察された。

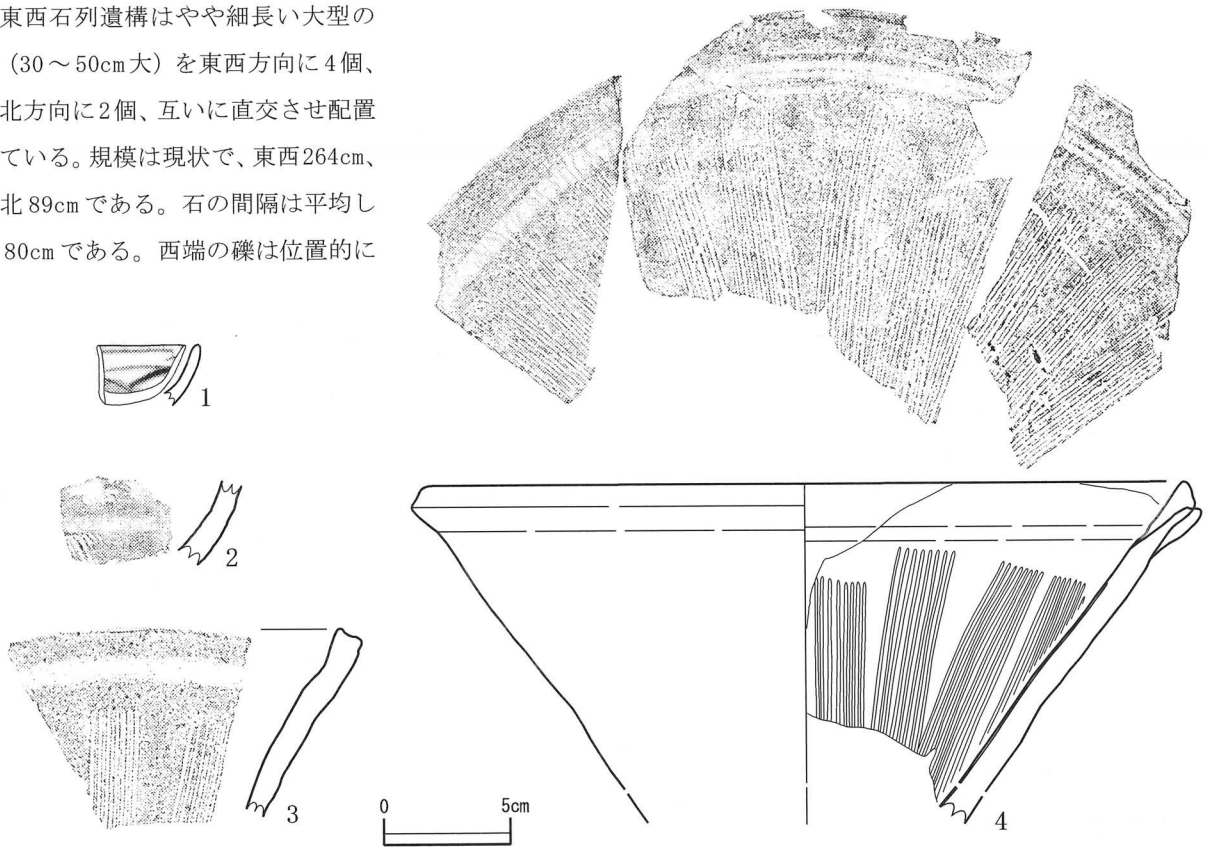
ピットは北側に4基、南側に3基検出されている。この内、西側の攪乱に接した2基が、建物の礎石跡と思われるピットで、円礫を多数伴っている。この2基は、位置的に見て2区のP35・P36や第1試掘区の東西列のピットと同一軸線上近くもしくは直角関係にあり、これらが同一の礎石建物跡になる可能性もある。

(3) 第3試掘区

Ⅳ層上面においてさまざまな遺構が検出された。西端からは敷石遺構が検出された。中央部付近には南北石列遺構があり、中央東側からは東西石列遺構が検出されている。この内、敷石遺構の北辺の方向と東西石列遺構の方向とがほぼ一致しており、その方向とほぼ直交するのが南北石列遺構である。また、中央には土坑が1基検出されている。

敷石遺構は板状の石（20cm大）を使用して上面がほぼ平坦になるように、かつ北側の辺が直線状に並ぶように配されている。現状で東西104cm、南北29cmを確認している。付近より鉄製品が出土した。

東西石列遺構はやや細長い大型の礫（30～50cm大）を東西方向に4個、南北方向に2個、互いに直交させ配置している。規模は現状で、東西264cm、南北89cmである。石の間隔は平均して80cmである。西端の礫は位置的に



図版番号	登録番号	地区	遺構・基本層	種類	器種	法量 (mm)			産地・年代	特徴・調整など	写真番号
						口径	底径	器高			
1	J3	1T	南東P(検出面)	磁器	皿	-	-	-	肥前・18c	草花文	5-14
2	I2	3T	Ⅲ層	陶器	播鉢	-	-	-	美濃系	内外面鉄軸	5-11
3	I3	3T	SK上面	陶器	播鉢	-	-	-	丹波・17c初～前半	焼き締め おろし目の単位7本	5-8
4	I4	3T	Ⅲ層	陶器	播鉢	-	-	-	丹波・17c前半	焼き締め おろし目の単位8本	5-9

第19図 試掘区 出土遺物

見て攪乱によって位置を動かされた可能性がある。

南北石列遺構もまたやや細長い大型の礫（30～40cm大）を南北方向に3個並べている。東西石列遺構と異なり、石同士が接している。西隣には丹波産播鉢の一括破片が出土している（第19図4）。これらの石列の下には径2～3cmの小礫が敷き詰められたプランがみられ、各々の石はこの上に乗った形となっている。プランの方向性からみても両者は相互に関係のある遺構とみられる。

地区	遺構・基本層	瓦					土師器	須恵器	土師質土器	陶器	磁器	瓦質土器	鉄製品	石製品
		平瓦	軒平瓦	丸瓦	その他	不明								
1区	SK1	38	1	13	6	7	3		27	2				
	SK2							2						
	SK3						7							
	SD1	1						1						
	P3	1												
	P8								1					
	P16	1		1		1								
	P17													1
	P19	1												
	P20	2								1				
	P21						1							
P22	3													
I層	16		18				3		2					
2区	SK5						1							
	SK6	5		1	1	1	2		2					
	SK10	5				4								
	SK11					1								
	SK13						2							
	SK15	7		2	1									
	SK20												1	
	SK22	2							1		1			
	SK27	11		2	1									
	SK28						1							
	SD2	25		1			9	4	1	1			2	
	P14	1												
	P30							1						
	P66	2												
	雨落ち溝	3							2				3	
	I層	3		2	5					2				
II層	83	1	9	13	44	1		1						
IIc層	16		7	2	3		1			1				
IId層	9		3		5	3						11		
III層	87		9	14	21	22	1	7				4		
攪乱	3		3			1	1	2				1		
1 T	P検出面									1				
2 T	III層	37		5	9	5	1							
	攪乱	23		4	10		2							
3 T	SK								1					
	敷石遺構											1		
	南北石列遺構							1						
	玉石層上面								23					
	III層	5		7	3			11	4	2	1			
IV層上面	20		6	1										
合計		407	1	93	66	103	51	6	59	33	5	1	23	1

第2表 遺物集計表

土坑は東西石列遺構の北側に検出された。石列が乗る小礫を切っている。形態は大きな楕円形状をなしているが規模は不明である。出土遺物は検出面上から丹波産播鉢（第19図3）が出土している。

その他の出土遺物としては、III層中より土師質土器、丹波産播鉢、岸窯系播鉢、美濃系播鉢、中国産青花碗、瓦質土器がある。

第3試掘区で検出されたこれらの遺構群は、1・2区や他の試掘区のものに建物に関連した遺構であるのに対し、それらを取り巻く空間に配された何らかの施設と考えられる。

第6章 まとめ

今回の若林城跡第4次調査は調査面積約380㎡と比較的小規模なものであったが、本遺跡においては、以下のようなこれまでに無い重要な成果を上げることができた。

[基本層について]

調査区全域の基本層はI～VI層に分層された。I層は表土層で、層中には煉瓦やコンクリート片など近年の建物改築に伴う廃棄物などが多く混入している。

II層は刑務所施設に関わる整地層或いはそれに類するものとみられる。整地層上にあったものは明治10年に建築が開始された六角塔と呼ばれる房舎で、この建物は昭和48年に解体撤去されるまでの間この地にあった。II層は2

区においてその締まり具合が強く、場所によっては4層に分層できるなど、かなり入念な地固めを行なっていることがわかっており、その傾向は六角塔の基礎部分に顕著であることが刑務所側記録図面との照合からわかる。

Ⅲ層は調査区全域に広がり、2区においてはその上面から溝跡や土坑などが検出されている。Ⅲ層は全体に均質で、Ⅳ層の様なブロック土を殆ど含まず、耕作土に近い土壌と見ることができる。層中には近代以降の遺物は含まれず、近世瓦が多い他、本来はⅣ層面遺構に伴っていたとみられる円礫が多数含まれる。またⅣ層上面で幾つかの溝状遺構が検出されているが、これらの堆積土はⅢ層類似のもので、溝状遺構はⅢ層土壌に関係する遺構の可能性もある。

Ⅳ層はⅢ層同様に調査区全域で確認されている。層は全体がブロック土により構成され、明らかに整地に伴った土壌であることがわかる。Ⅲ層に比べ締りが少なく、層厚は一定しないが、これはⅢ層の成因・性格に関係しているものと考えられる。上面からは円礫を伴った若林城期と考えられる数多くの遺構群が発見されており、Ⅳ層はこれら遺構群の建設に伴い造成された層と考えられる。

Ⅴ層は今回の調査では2区の一部にのみ確認できた層である。調査は遺構の検出にとどまっていることから、詳細は不明であるが、その土質・土色等から若林城築城前の旧表土の可能性も考えられる層である。

Ⅵ層は本来、この地区において古代～近世遺構の検出面とされる層で、洪水等による自然堆積土層である。隣接する第2次調査では古墳周溝や堅穴住居跡が発見されているが、本調査区下層においてもこれらの遺構が存在するものと見られる。また1区においてⅥ層面より急激に落ち込むプランについては遺構以外に河川跡などの自然地形であることも考えられる。

[検出遺構について]

今回の調査では後世の攪乱により壊されている箇所以外は全域に遺構が確認された。このうち注目すべきはⅣ層面検出の遺構群である。

1区の礎石建物跡は東西に6間以上の規模を持ち、礎石自体は持ち去られているものと見られるが、円礫による基礎地業が成された礎石跡は規模も大きく、一般の礎石を用いない建物跡とは一線を画する構造といえる。建物自体は調査区北側を中心に存在するものと見られるが、この礎石列が構造上、母屋に伴うものなのか、或いは縁を構成するものなのかは不明である。また1区には他に礎石跡とみられるものや、同じく円礫を充填した大型の土坑状プランが存在することから、周辺には同様の別建物が存在する可能性が高い。

2区はかなり広範に攪乱が及んでいたが、遺構の密度は高いものであった。このうち東部で発見された雨落ち溝跡は規模は不明であるが、溝の両側には側石を配しており、調査区外に存在すると見られる建物は1区検出のものかそれ以上の規模や格式をもったものである可能性がある。西端の礎石跡とみられるものは、礎石跡自体の規模こそ1区のものより小型であるが、その方向性などから北側の第1・2試掘区検出の同規模の礎石跡と同一の建物となる可能性もある。またこれらの周囲には礫を伴わない溝状プランや土坑状プランなどが数多く確認されており、これらと建物跡との関係も興味あるところである。

第3試掘区においては狭い調査区にもかかわらず、他地域とは異なった遺構の構成が確認された。発見された敷石遺構や石列遺構などはその下に敷かれた円礫層と共に、城内の施設を形成しているものと考えられ、現在のところ断言はできないが、各遺構の方向はあくまでも周辺建物の方向と強い関連性が伺われることから、これらは建物間に配された通路や庭園などの居住空間以外の施設で、建物群を取巻く遺構であった可能性が考えられる。

[出土遺物について]

出土した遺物で最も数量の多いのは瓦である。これらはⅢ層を中心に出土がみられたが、遺構内でまとまって出土する状況は無かった。瓦は平瓦や丸瓦などの本瓦で、中には少量の軒平瓦などが見られる。これらの瓦類は仙台北城跡出土のものと同様・規模・文様などにおいて共通性が見られ、城の主要な建物は瓦葺きであったものと見られる。

また若林城が短期間に廃城となった経緯を考えると、瓦もまた建物同様に城外に搬出されたことも考えられる。その他の遺物としては少量の陶磁器があるが、ほぼ遺構に伴う時期のものとしては丹波産の播鉢がある。これらは17世紀初めから前半と見られ、若林城期と一致する。丹波産播鉢は仙台城跡でも多く出土しており、当時の生活の一端をうかがい知れるものである。これらの陶磁器も含め、当時の生活品についてもまたその多くは城外に持ち出された可能性も考えられる。また小破片ではあるが、土師質土器の皿や焼塩壺などや鉄釘も多くみられ、これらもまた若林城期のものと考えられる。

〔遺構の変遷について〕

本調査は当初、古墳や古代遺構の検出が主となるものと考えられていたが、調査の方針に変更があったことから、これらの時代の状況については確認できなかった。しかしながらIV層面遺構の検出はこれまで不明とされてきた若林城跡本来の遺構の在り方を解明するきっかけとなった。

若林城が城として機能したのは、寛永5年（1628）の造営から寛永13年（1636）に政宗の死により廃城となるまでの僅かな期間であった。調査区は城のほぼ中央部に位置し、その位置的なことからだけでも城の中核をなす建物などが存在したであろうことが想像できる。記録によると城内には庭園や的場などが設けられていたことがわかっている。しかしその当時の建物配置等を示す絵図は無く、廃城となった後の姿が表わされているのみである。今回検出された若林城期と考えられる遺構群は遺構同士の重複はありながらも、その主たる遺構として建物を構成する礎石跡同士においての重複はみられず、その存続期間もまた短いものであったろうことが想像される。

廃城後の城内がどのように利用されていたかは僅かな文献と絵図により知るのみであるが、この地は「若林御帳蔵」や「若林御薬園」として藩の管理の下、機能していたことがわかっている。今回発見された遺構上には、若林城が廃城となった以降に形成されたⅢ層が付近全域にみられる。このⅢ層についてはその性質や出土遺物などから近世の耕作土の可能性が高く、廃城後の城の姿をそのまま現しているものと見られ、Ⅲ層上面で検出された溝跡などの遺構群についてもまた廃城後の諸施設に関わる遺構と見られる。今後は畑に関する遺構の発見の可能性もあり得る。

明治に入ると、この地に宮城集治監が置かれ、今回の調査区の場所に六角塔が建設される。これまでは刑務所施設に伴う度重なる改変のために、下層遺構はその殆どが失われたものと考えられてきた。しかしながらこの地区においては、逆に存続し続けた建物により若林城の遺構をはじめとする遺構群が破壊を免れてきたといえる。今回の調査では各時期における遺構群の周辺への広がり確認されており、今後の継続的な調査によりこれまで謎だった若林城の解明にさらなる成果が期待される。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1985 「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第76集
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大学埋蔵文化財調査年報6」
仙台市史編纂委員会 1994 「仙台市史 特別編1 自然」
仙台市教育委員会 1997 「養種園遺跡発掘調査報告書 一伊達家別荘跡の調査一」 仙台市文化財調査報告書第214集
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報9」
仙台市史編纂委員会 2000 「仙台市史 通史編 古代中世」
九州近世陶磁学会 2001 「国内出土の肥前陶磁 一東日本の流通をさぐる一」 第11回九州近世陶磁学会資料
仙台市教育委員会 2002 「若林城跡 一第3次発掘調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第256集
仙台市教育委員会 2003 「仙台城跡 一平成14年度調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第264集
仙台市教育委員会 2004 「仙台城跡 一平成15年度調査報告書一」 仙台市文化財調査報告書第270集

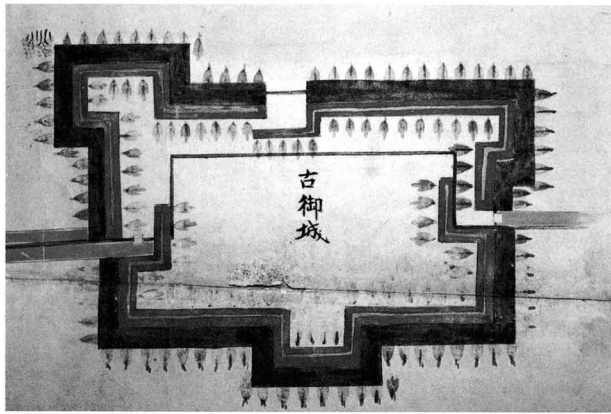


1. 若林城跡航空写真（東から）



2. 1区全景（東から）

写真図版1 若林城跡航空写真・1区



1. 「仙台城下絵図」(天明～寛政年間)



2. 1区全景 (南から)



3. 1区P4礎石跡検出状況 (南から)



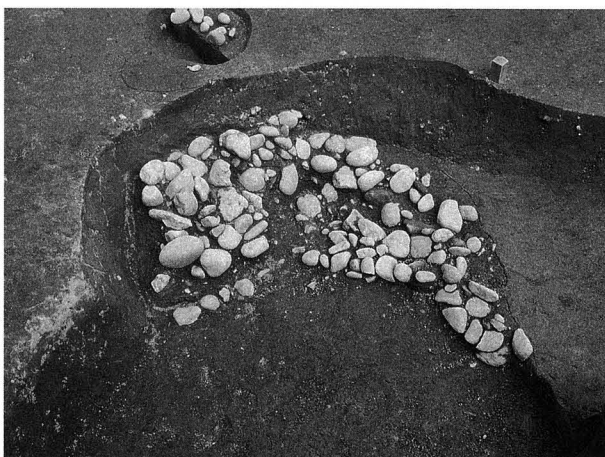
4. 1区P9礎石跡検出状況 (南から)



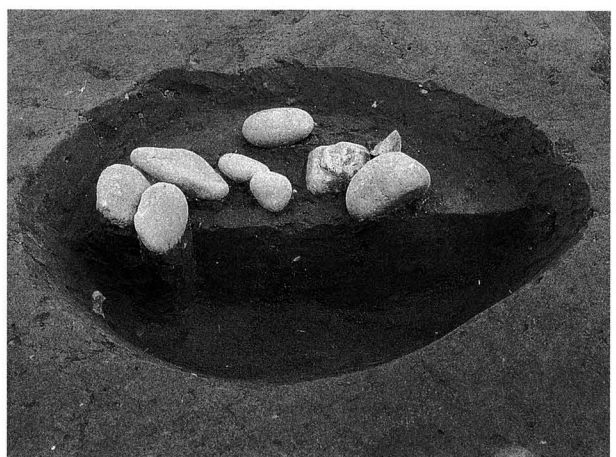
5. 1区P10礎石跡検出状況 (南から)



6. 1区P16礎石跡検出状況 (南から)



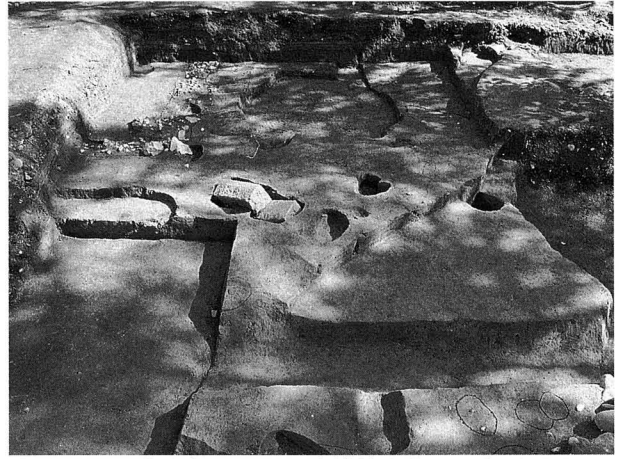
7. 1区SK1検出状況 (南から)



8. 1区P7断面状況 (西から)



1. 2区IV層上面遺構検出状況 (東から)



2. 2区東半部IV層上面遺構検出状況 (西から)



3. 2区西端部IV層上面遺構検出状況 (東から)



4. 2区中央部IV層上面遺構検出状況 (西から)



5. 2区西壁断面 (東から)



6. 2区北壁断面 (南から)



7. 2区雨落溝跡検出状況 (西から)



8. 2区 雨落溝跡検出状況 (北から)



1. 2区P35検出状況 (東から)



2. 2区P36検出状況 (東から)



3. 第1試掘区IV層上面遺構検出状況 (東から)



4. 第2試掘区IV層上面遺構検出状況 (西から)



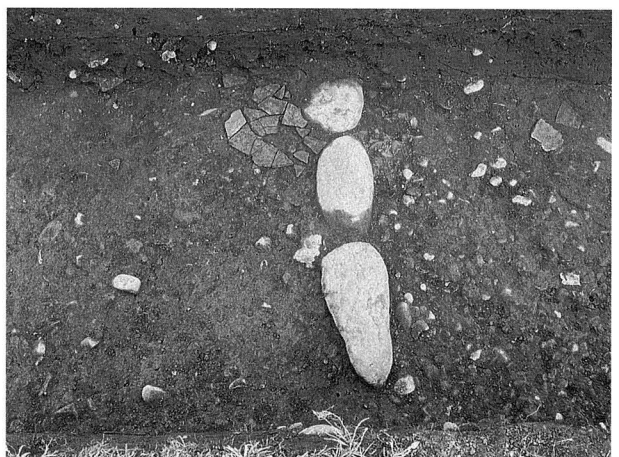
5. 第3試掘区IV層上面遺構検出状況 (東から)



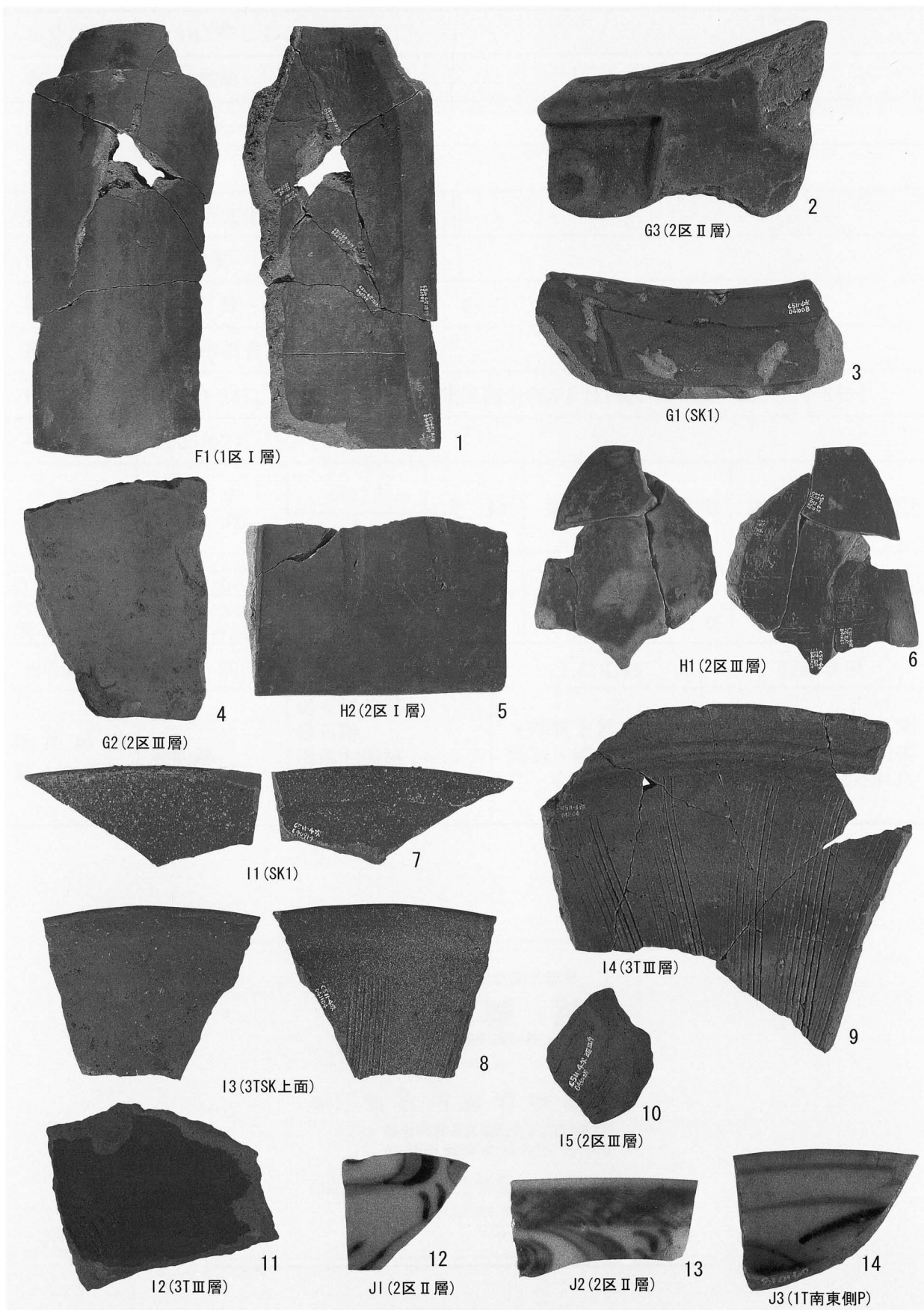
6. 第3試掘区敷石遺構検出状況 (北東から)



7. 第3試掘区東西石列遺構検出状況 (南から)



8. 第3試掘区南北石列遺構検出状況 (南から)



写真図版5 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	わかばやしじょうあと							
書名	若林城跡							
副書名	第4次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第292集							
編著者名	佐藤 淳・岡本 範之・佐藤 好司							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月日	2005年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかばやしじょうあと 若林城跡 だい じちょうさ 第4次調査	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 わかばやししくふるじろ 若林区古城	04100	01030	38° 14' 13"	140° 54' 07"	2005. 09. 06 ～ 2005. 11. 05	380m ²	宮城刑務所 全体改築
所収遺跡名	種別	主な遺構			主な遺物		特記事項	
若林城跡 第4次調査	城館跡	礎石建物跡 礎石跡 雨落ち溝跡 敷石遺構 石列遺構			土師質土器・瓦・ 陶器・磁器・石製 品・金属製品		伊達政宗が寛永年間 に過ごした城の遺構 が初めて発見された	

仙台市文化財調査報告書第292集

若林城跡

— 第4次発掘調査報告書 —

平成17年2月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3丁目7番1号
仙台市教育委員会文化財課

印刷 石川特殊特急製本株式会社

大阪市西区鞠本町1丁目5番15号
TEL 06-6445-1851

